マドゥラ人とマドゥラ島　　西祥郎著

塩のマドゥラ島

（1）　マドゥラ島の塩……3

（2）　マドゥラ島の塩……5

（3）　塩の専売……7

（4）　塩の専売……9

（終）　マドゥラ島の塩……11

マドゥラ島の鉄道

（前）……13

（後）……15

恐怖のマドゥラ人

（1）　男は怖い生き物……17

（2）　怖いマドゥラ男……19

（3）　男はマドゥラ……21

（4）　男の世界はやくざ者……23

（5）　貧困の悪循環……25

（6）　ジャワ東端はマドゥラ世界……27

（7）　派手好みのマドゥラ人……29

（終）　他人の鑑賞物になるのではない……31

文化崩壊するマドゥラ人

（1）　種族別人口算出法……32

（2）　種族別人口算出法……35

（3）　血統子孫人口の意味……36

(4) マドゥラ文化 38

(5) マドゥラ文化 40

チュルリッとチャロッ

(1) チャロッ 43

(2) 果し合いの条件 45

(3) 金が最大の条件 47

(4) 果し合いの経済効果 48

(5) 火遊びではなく命遊び 50

(6) 果し合いは男の花道 52

(7) チュルリッ 54

(8) 英雄サケラ 56

(9) サケラの最期 58

(10) 鉈と鎌 60

(11) 鎌の殺人事件 62

マドゥラ史略

(1) 古代人の移住 65

(2) 服属の歴史 67

(3) トゥルノジョヨの反乱 69

(4) マドゥラの王 71

(5) プリブミ王国を乗っ取る 73

(6) 辛抱強い VOC 75

(7) 中華系マドゥラ人 77

「塩のマドゥラ島（１）」（2023年06月05日）

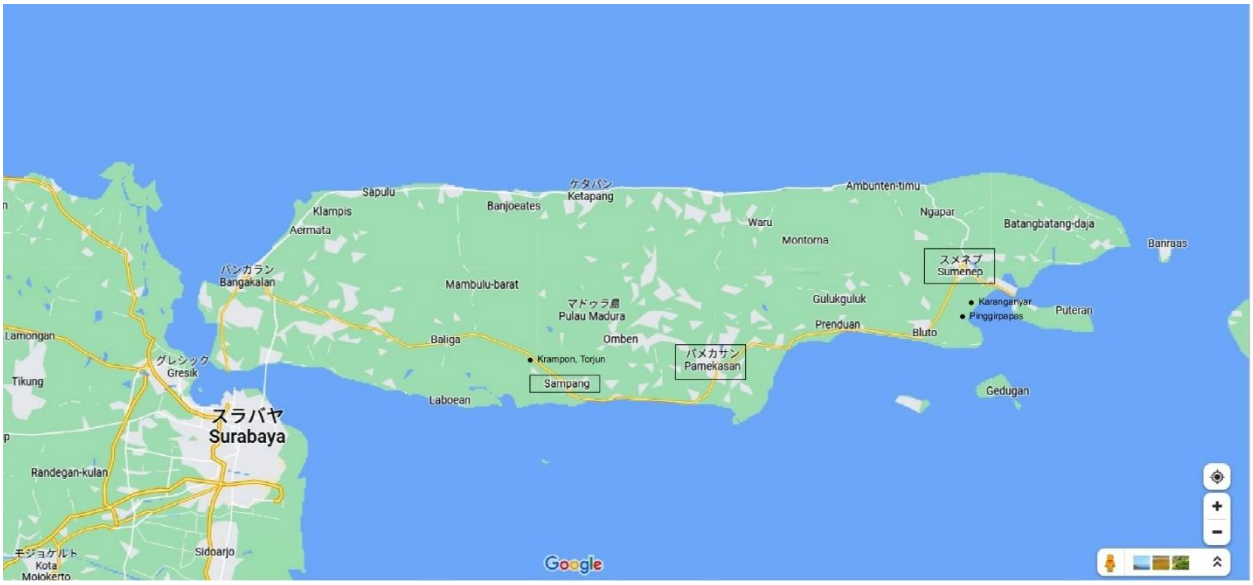
インドネシアの食塩生産量は年間130万トンだ。そのうちのおよそ9割がマドゥラ島で作られている。国内の食塩生産分布はマドゥラを筆頭に東ジャワ州、中部ジャワ、西ジャワ、バリと東西ヌサトゥンガラ州、南スラウェシ州、アチェ州という偏りのある構図を描いている。

マドゥラ島は昔から塩の生産センターになっていて、塩の島とも呼ばれてきた。マドゥラの製塩産業の発端に関して、こんな話がある。

ヨーロッパ人がヌサンタラにやってくる前の時代、バリ人の軍勢がマドゥラ島に攻め込んできた。マドゥラ人は敗れて降伏した。そのときのバリ兵士の一部がマドゥラ島に住み着き、塩作りを始めた。かれらが住み着いたのは今のスムヌップ県ピンギルパパス[1]村だ。その子孫は今もその村で塩作りを続けている。

しかし今でも塩作りの村であるピンギルパパス村民は、この地方で最初に塩田を開いた人

物がジャワから来たイスラム宣教師シェッ・カバサだったと信じており、その13代目の子孫は今もピンギルパパス村で暮らしている。



[1] Pinggirpapas

また別の話もある。あるとき、イスラム宣教者キアイ・オンゴ・ウォンソがスムヌップ県カリアガッ海岸を歩いていた。師に随順する数人の弟子たちが後ろに従う。濡れた地面を踏む師の足跡に何やら白い結晶体が数個落ちているのに弟子が気付いた。それは師の足跡にだけ落ちている。弟子はそれを拾い集めた。何だろうかとよくよく観察し、ついでになめてみた。

しょっぱい味がした。師はカリアガッの住民に塩を作れと勧めていたのだ。こうしてたくさんのマドゥラ人が塩を作るようになり、マドゥラに製塩産業が勃興した。

カリアガッのひとびとが神聖視しているキアイ・オンゴ・ウォンソの墓[2]はスムヌップ県サロンギ郡クドゥンダダップ村にある。このキアイはいったい何者だったのだろうか？その詳細を現代に伝えるものは何もない。このキアイの足跡がマドゥラ人に製塩産業を開始させ、大いに繁栄する時代をマドゥラにもたらした大恩人であるとして地元民はかれを尊敬しているのである。

マドゥラ文化研究者はキアイ・オンゴ・ウォンソについて、スムヌップのカリアガッで地元民にイスラム布教を行ったジャワ人宣教者ではないかと見ている。昔のイスラム宣教者はただ宗教の教えを説いていただけではない。生活に役立つ何らかの知識や技能を身に着けており、かれらはやってきた土地に住み着いて地元民と共に暮らし、地元民に自分が修得した知識技能を教えることもした。

マラン国立大学文化人類学者は、そのキアイが多分ジャワ島東部北海岸部のグルシッやラモガン[3]からマドゥラ島東部にイスラム布教のためにやってきた者ではないかと言う。マドゥラ島東部地方にやってきた宣教者の中にはグルシッやラモガンの出身者が多く、またかれらの出身地には製塩業が古くから根付いていた。ジュンガラ王国時代の１１世紀に作られたガラマン碑文がその地方での製塩業の古さを裏付けている。

マドゥラ社会でキアイ、つまりイスラム宗教師の社会的地位はたいへんに高い。そのキアイから授けられた製塩業は地元民にとって大いなる恵みと見なされた。たとえ苦労の多い労働ではあっても、それをやりと

---

[2] Google Map では Kiyai Onggo Wongso の墓地はジャワ島の Pekalongan 南方にある。

[3] 東ジャワ州北岸の町

げて恵みを享受することを怠っては人の道に外れるだろう。マドゥラ人にとってのそんなモチベーションがそこに発生したかもしれない。

［ 続く ］

「塩のマドゥラ島（２）」（2023年06月06日）

マドゥラ島で、西はサンパン県から中部のパムカサン県、そして東端のスムヌップ県に至るまでの南海岸部にたくさんの塩田が設けられている。マドゥラ島に与えられた塩の島というその看板を支える大黒柱がその地域だ。VOCはその地域を zoutnegorizen と呼び、後のオランダ東インド政庁は zoutlanden と呼んだ。オランダ語 zout は英語の salt だ。

東ジャワ北岸部のジャワ海に面する海岸部からマドゥラ島南海岸部に至るコーストラインでは、１１世紀と言わず１０世紀になる前から良質の食塩生産が盛んに行われ、その製品がジャワナからスラバヤまでのジャワ島北海岸線にできたさまざまな商港からヌサンタラ一円に積み出されていた。１７世紀には、ジャワの商港で取引される優良商品として塩はタバコ・米と並び称されるものになっていた。そしてマドゥラ島はその優良商品供給者として重要な位置を占めていたのである。

JPクーン総督がマルクからVOCアジア本部をジャワ島に移したことで、ジャワ産の物資がVOCの取扱商品になる道がいとも容易に開かれた。スパイスの取扱いだけで終わることに飽き足らなかったクーンの敷いた路線をその後のVOCは忠実に実行に移し、あたかもただの会社が後に出現するコロニアリズムを先取りして展開する姿をわれわれは目にすることになった。おかげで後世のひとびとの間で、VOCがただの会

社であったという本質と東インドで行われた実態を結び付けることに困難を抱くことすら起こったようだ。

VOCがマドゥラの統治システムの最高パワーを握ったとき、塩の生産と流通を独占すれば巨大な利益を計上できることは明白だったものの、それを実行に移すだけの人手が不足していた。

経営を行わないで利益を得る方法は貢納だ。そしてその時代の貢納が税と呼ばれたことも一般的な現象だった。既存の生産と流通には手を出さず、既存の統治システムを使って税を課し、徴税者を任命して現場で金銭貢納を強いるのである。そして華人がその徴税者になった。

華人は華人で流通分野を支配しようと努め、その企てを成功させるために生産者がしばしば追いつめられることも起こった。このパターンは産品が塩であれ何であれ、たくさんの分野で同じように行われたから、後の時代にインドネシアで人種間の軋轢を生む原因になった。

1861年に塩の価格が高騰した。海岸に土地があれば、黄金の粒さながらの塩を作ることができる。新たに塩田が作られ、また土地を塩田用に貸していた者の間からも、自分で塩を作って儲けようとする者が現れた。土地の権利に関する紛争が激増した。紛争が起こった塩田では作業が行われなくなる。遊んでいる塩田をなくすには、土地の権利者を法的に確定してやることだ。

社会的有力者が行う不正がどれほどはびこっただろうか？弱者庶民が泣きを見る結末は決して少なくなかったのではあるまいか。東インド政庁はその延長線上で、塩の生産をマドゥラ島にしぼることにした。過去の実績を踏まえて政治的に生産センター機能を持たされたのだ。塩に関するあらゆる優遇措置がマドゥラ島に向けられ、他地方の塩生産は行政のバックアップが得られなくなった。

19世紀半ばごろのマドゥラ島は、オランダ東インドにおける塩生産の大センターになっていた。1862年のマドゥラ社会の状況を記した記録によれば、塩生産者は他のマドゥラ人よりはるかに裕福な暮らしをしており、贅沢品を買う余裕を持っていたそうだ。

しかしオランダ東インド政庁がマドゥラの塩に搾取の手を伸ばす日がやってきた。搾取の体制作りは段階的に時間をかけて行われた。マドゥラ人の利益が削り取られ始めた。

カリアガッの塩田用地は取り上げられ、政庁は工場を設けてそこを製塩センターにした。好景気に湧く産業センターはそこに関わるすべての者に?栄のしぶきを浴びせかけた。夜な夜な煌々たる灯りの下で賑わうカリアガッの町はスムヌップの町より繁華だと評されたそうだ。[続く]

「塩のマドゥラ島（3）」（2023年06月07日）

20世紀に入ると、マドゥラの統治行政形態が変更された。プリブミ貴族が就任するアディパティによる行政から、オランダ東インド政庁が直轄する行政方式への移行だ。1921年になって東インド政庁内に、オランダ東インドにおける塩の生産と流通を一手に握る塩専売局が設けられた。

そして1936年に塩専売局は塩産業を独占する動きを開始した。1937年、アヘン塩専売局に改組された塩専売局はマドゥラの製塩産業を官営に変える動きを進めたのである。これは流通機構を支配している華人の意向が操ってきた塩生産のスタイルに風穴をあけるものになった。

独占体制を構築する中で、政庁はマドゥラ人の土地を取り上げることをたくらんだ。地主になって自分の土地から産出する産品の所有権を握ろうという企てだ。

政庁はピンギルパパス、マルガン、カランアニャルの塩田用地を50年間、スムヌップのアディパティから借地した。ユリアナ王女に憧れているアディパティを巧みに口車に乗せて、先祖代々地元民が居住し塩田稼業を行っていた土地を住民に断りもなく借地させたというのがこの話だ。借地契約書は1936年8月7日付で作られた。それまで自分の土地で作った塩をオランダ人に売っていた生産者は、その日からいきなり日雇い労働者の立場に落とされた。生産者の収入は激減し、政庁のあげる利益が大きく膨らんだのは言うまでもあるまい。

政庁は塩の蒸留工場を2ヵ所に設け、そこで生産された塩は一部をブリケット状、のこりは粉粒状で梱包し、工場から港に送り出して船積みした。工場が設けられた土地には西洋人幹部が居住するための環境が設けられたため、プリブミの目にはオランダ村が作られたように映った。そのひとつがサンパン県トルジュン郡のクランポン村だ。

1905年、クランポン村に梱包工場が作られ、西洋人職員のためにオランダ風の住宅コンプレックスが設けられたことで、ひなびた村がニュータウンに変身したのである。村の中には教会が建てられてキリスト教の活動と布教が行われた。映画館・スポーツ施設・噴水のある公園まで作られた。村の中を電気が通り、上水道が通った。県庁があるサンパンの町にすら、まだ電気がなかった時代だ。県下でクランポン村だけが電気のある生活を享受していた。

20世紀初期にサンパン県には1，377、パムカサン県1，547、スムヌップ県に1，648枚の塩田があり、生産は最高潮に達していた。その時期、塩生産者は繁栄を謳歌し、数千人のマドゥラ人が塩に関わって豊かな生活を楽しんだ。

マドゥラ島という辺地で生産される塩を消費地に配送するため、オランダ王国の国営船会社 Koninklijke Paketvaart Maatschappij が海上輸送と島内の陸上輸送に携わった。だが官立の塩会社も自社所属の海運会社 Oost-Java Zeetransport を興した。KPMの料金が高すぎるというのがその理由だった。

そんな状況はまた別のビジネス冒険家たちを塩輸送事業に誘い込むことになった。マドゥラ島南海岸部で蒸気トラムを走らせ、西端のカマル港からスラバヤに運べばよい。Madoera Stoomtram Maatschappij が設立され、線路敷設は19世紀末から開始されて、1901年には東端カリアガッから西端のカマルまでがつながった。

こうして、マドゥラ島からの塩の配送はKPM・OJZ・MSMというオランダ系大資本の三つ巴になり、さらに必要に応じてプリブミの帆船海運もそこに混じりこむ状態になった。マドゥラ島の塩はさまざまな港からさまざまな手段で海を越えたのである。

20世紀初めの20年間はマドゥラ塩の黄金時代を画し、政庁は年間1．8億フルデンの収益を計上した。30年代に入って世界不況の影響を蒙ったものの、政庁の塩事業は1．5億フルデンのレベルを保ち、激減したアヘン収入を上回る底力を見せた。[続く]

「塩のマドゥラ島（4）」（2023年06月08日）

インドネシア共和国が独立し、更にオランダ資産が国有化され、オランダの官民が運営していた大型事業は共和国の国有事業体が引き継いだ。マドゥラの製塩産業は国有事業体ガラム株式会社 PT Garam[4]が引き継いだ。そのとき、ガラム社はマドゥラ島に製塩工場ふたつ、6千Haの塩田、ジャワ島のルンバン・トゥバン・パングル・パチタンに8百Haの塩田を自社資産として持った。

ところが50年の期限でオランダ東インド政庁が借地した土地は、期限が満了したにもかかわらず旧所有者への返還がなされなかった。その土地はガラム社の自社所有地にされてしまっていたのである。

ピンギルパパス住民1，113戸、マルガン1，400戸、カランアニャル90戸のほぼ7割が塩生産期の6～11月、パスルアン・グルシッ・スラバヤなどにあるジャワの塩田に移って季節労働を行っている。かれらの

[4] 「塩」の意味

出稼ぎ労働は一家が丸ごと別の土地に移住して暮らすから、当然子供も同行する。子供たちはその期間、小学校を休まざるを得ない。小学生は一年の半分を休学することになる。

その半年間の塩田労働者としての稼ぎはせいぜい3百万ルピア程度であり、出稼ぎ期間中の暮らしは竹編み壁の掘立て小屋で寝起きする日々になる。

インドネシア共和国になってからの数十年間は、マドゥラの食塩生産者の収入はジャワの米生産者のそれよりも3倍大きかった。ガラム社のお膝元であるカリアガッは毎夜煌々たる明かりの下で夜市さながらの賑わいが繰り広げられ、県庁所在町スムヌップよりもはるかに栄えている印象を見せつけていた。

１９８０年代までガラム社は栄耀栄華のシンボルとされ、県下で高い社会ステータスを得ていた。婿を持つならガラム社従業員が第一優先だった。一般のマドゥラ人よりも収入ランクが一段上であり、その経済面の評価が社会ステータスを押し上げていたのだ。

７０～８０年代の塩の価格は１キロが米およそ3キロに相当した。だがその後、塩はスターの座から転落して行った。今では塩１２キロが米１キロに相当している。いつ何が原因で転落が始まったのだろうか。それに関して、スムヌップの塩生産者財団役員の語る話は次のようなものだった。

１９７５年にオルバ政府が塩の生産に使われていた国有地をガラム社に払い下げた。ガプラ郡１５０Ha、サロンギ郡とカリアガッ郡が１４０Ha だった。これはグルシップティ川をせき止めて、現存する塩田への海水供給の便を高めるのが目的だった。ただし、その計画が２年間で実現されなければ、土地は元の所有者に戻されることになっていた。

それまで塩生産者が製塩に使っていた土地が取り上げられて国有事業体の所有地にされたのである。反対する生産者たちに国家体制を危うくする謀反人の烙印が捺され、共産主義者と言われ、あげくのはてに刑務所入りといったオルバスタイルの措置が執られた。だが結局、ガラム社の計画は実現されなかったのだ。おまけに、塩生産者に土地を戻すという動きを誰も行わなかった。ガラム社は現状の上にあぐらをかいた。

一部の塩生産者が土地返せの運動を始めた。塩生産者は法廷に告訴した。一審は勝ったが二審で敗れた。再審請求を出しているものの、動きは止まっている。おまけに塩生産者も決して一心同体でなかった。ガラム社が塩生産者財団の一部のメンバーに土地を戻したことで、塩生産者も仲間割れを起こした。このコンフリクトによって塩の生産販売を独占している国有事業体のガラム社に長期の生産低下が起こった。

最近でも政府はガラム社に年産3百万トンレベルの目標を与えているが、実績は百数十万トンで推移している。マドゥラの塩生産者たちは生産活動のやる気を失い、現生産者の子供たちの中に親の家業を引き継ごうと考える若者はほとんどいなくなっている。まるで、海に囲まれた島嶼国家でありながら、塩は生産者に繁栄と福祉をもたらさない国に向かって歩んでいるかのような皮肉な状況だ。[続く]

「塩のマドゥラ島（終）」（2023年06月09日）

塩田で塩を均すためのソロッと呼ばれる道具を、ムッソンさん70歳は最後の塩田に差し入れた。マドゥラ島パムカサン県ガリス郡パンダン村の塩生産者のひとり、ムッソンは、このあとできあがっている塩をかき上げて山にし、それを袋に入れて3百メートルほど離れた街道際まで運ぶのだ。その運搬は日雇いの若い者が行う。ここでは今ちょうど、塩の収穫が行われているのである。これは2011年10月のコンパス紙記事だ。

「今回の収穫はできが悪かった。二級品でしか売れない。原因は海水が足りなかったからだ。収穫はほぼ5トンあるが、今の仲買値はトン当たり38万ルピアだから、利益が出ないかもしれない。」ムッソンは静かにそう語る。

今は一級品でも55万ルピアでしか売れない。政府が定めた生産者価格の75万ルピアは絵に描いた餅になっている。

15日間かけて生産したこの収穫のための経費をかれは記者に明かした。揚水ポンプレンタル料10万ルピア、ガソリン4万5千、塩均し作業20万、街道際までの運搬15万、日雇い者への食事とタバコ7万5千。

すると二級品5トンで190万の収入、経費は57万だから儲けは133万ということになる。だがそれでは終わらない。土地オーナーと儲けを折半する契約になっている。そう、ムッソンは塩生産者だが、自己所有地を持たないのだ。ムッソンの手にいくら残るのか？それを15日で割れば一日の稼ぎはいくらになるのか？

去年は異常気象で雨が多かったから、ろくな生産量にならなかった。今年は晴天が多いから期待していた、とムッソンは言う。それで報酬はそんなものなのか。

塩田への海水の引き込みは昔から涸れ川を使ってきた。涸れ川に入って来る海水を風車で汲み上げるのだ。それが伝統的なマドゥラの製塩法であり、コストがかからない。毎年7月から11月ごろまで、対岸のブスキから強い風が吹いてくる。この自然の配剤がマドゥラの製塩業にメリットをもたらしてきた。

もちろん、バケツで海水を汲んで塩田まで運ぶ者もいる。スムヌップ県カリアガッ郡ピンギルパパス村のサユティさん70歳が行っているのがその方式だ。だがそれだと人間のエネルギーがとても消耗してしまう。

今年は涸れ川の海水量が少なかったために、風車で汲み上げることができない。しかたなくムッソンは揚水ポンプをレンタルした。しかしそんな経費を使いたくない者もいる。かれらは10月半ばに海面が上昇するまで待つことにし、それまで塩田は遊ばせておく。

かれらのような零細資本の一般庶民が行っている民衆製塩にはインフラ問題が付いて回る。ムッソンにしても、海水がたくさん得られたなら今回の収穫が一級品になっただろうことを確信している。だが涸れ川に海水をたっぷり流し込むことが零細生産者にできるわけがない。そんなことができるのは行政か、あるいはガラム社くらいだろう。ガラム社は自社の塩田に海水を供給するインフラを独自に作っているのだ。

世界で四番目に長い海岸線を持ち、豊かな労働力にあふれているインドネシアで、テクノロジーの世話にならなくても労働力でいくらでも生産が可能な産品の国内生産が国内総需要4百数十万トンの三分の一程度しか満たせていない。世にも不思議な物語がまたひとつ、ここにある。[完]

「マドゥラ島の鉄道（前）」（2023年06月12日）

オランダ人がマドゥラ島に軌道車両を走らせたのは、塩のなせるわざだった。マドゥラ島がオランダ東インドの食塩生産センターに指定されるという政治決定がなされたとき、マドゥラの塩生産は繁栄の頂点にあった。長い歴史の中で、塩がマドゥラの経済生活に長期にわたって豊かさをもたらしていた。たとえ、得られた富の大部分がオランダのものにされたとしても。

マドゥラ島に鉄道を走らせた民間会社 Madoera Stoomtram Maatschappij は1897年に設立され、東インド政庁からコンセッションを得て鉄路を敷いた。最初に開通したのはカマル⇔バンカランの18キロ区間であり、完成は1898年12月だった。その後、各区間が次のように開通している。

1899年2月　タンバガン⇔カリアガッ　20キロ

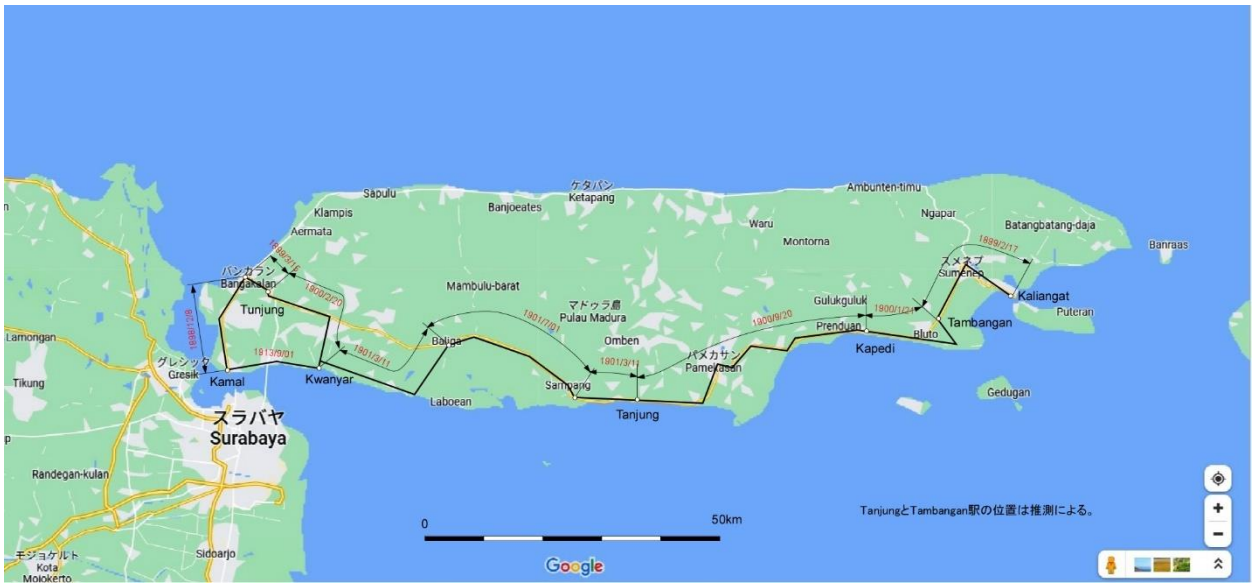
1899年3月　バンカラン⇔トゥンジュン　5キロ

1900年1月　カプディ⇔タンバガン　24キロ

1900年2月　トゥンジュン⇔クワニャル　22キロ，1900年9月　タンジュン⇔カプディ　45キロ

1901年3月　クワニャル⇔ブレガ　33キロ　1901年3月　タンジュン⇔サンパン　15キロ

1901年7月　ブレガ⇔サンパン　15キロこれでカマル⇔カリアガッ間は全線開通した。



１901年の全線開通でカマル⇔カリアガッ間176キロを蒸気機関車にけん引された貨物車と客車が一日に一便走った。カマル午前7時25分発、カリアガッ到着17時35分という発着予定時間が1929年の資料に見られる。その所要時間の長さはいったいどういうことなのだろうか？

この鉄道が塩の輸送を重視していたために、塩の生産地に設けられた駅での塩の積み込み作業に取られる時間をたっぷり読み込んだ運行スケジュールだったのだろうか。走行スピードがそんなに遅いとはいささか考えにくいように思われる。

しかし1980年代まで続けられたマドゥラ島蒸気トレムの走行が信じられないくらい遅かったことをバンカラン住民のひとりは次のように述懐している。バンカラン→カマルの18キロですら3時間もかかった。バンカランからパムカサンへ行くのにトレムを使うと一日仕事になった。バンカラン発正午12時のトレムに乗ると、パムカサン到着は19時半になった。

そんな蝸牛の歩みに似たトレムではあっても、学校や職場と家との往復にトレムを使うひとたちも決して少なくはなかった。サンパンの住民のひとりは1970年代に毎日トレムに乗って学校に通った思い出を物語ってくれた。かれの家には自転車が1台しかなかった。その自転車を父親が通勤に使ったので、かれは2歳年下の弟と一緒に毎朝学校まで、サンパンからトルジュンまでのおよそ9キロをトレムに乗って通った。

かれの奥さんは少女時代、母親が頻繁にトレムの中で物売りをしていたことを記憶している。「母はウラップ、アンピヤン、ルプッ、ピーナツなどをサンパン発バレガ行きのトレムに持ち込んで売っていましたよ。」

パムカサンでカラパンサピが催されるとき、トレムは鈴なりの乗客を乗せてパムカサンにやってきたそうだ。蒸気トレムはマドゥラ人の足としての役割を十分に担っていたように思われる。[続く]

「マドゥラ島の鉄道（後）」（2023年06月13日）

全線開通後、だいぶ後になってからMSMは更にクワニャルとカマルを直接結ぶ路線を敷いてカマル⇔バンカラン⇔クワニャル⇔カマルを環状線にし、カリアガッ⇔カマル間の距離を短縮させている。

1913年9月　カマル⇔クワニャル　26キロ

このマドゥラ蒸気トレムと呼ばれた鉄道はドイツのハートマン社製蒸気機関車が貨物車と客車をけん引して走った。燃料は薪と石炭だった。後にホエンツォラン社製蒸気機関車も加えられた。

しかし、タナメラ⇔クワニャル区間は世界大恐慌のために1936年に廃止され、パムカサン⇔カリアガッ区間は1940年にパムカサンでの塩生産がストップしたために閉鎖された。パムカサン⇔カリアガッ区間の鉄路は更に日本時代に撤去されて日本軍が持ち去っている。

その後は1980年代まで運行が続けられていたものの、採算が取れないことを理由にして1984年に残っていた全線の運行も停止されてしまい、そのまま今日に至っている。マドゥラ人の蒸気トレム利用頻度が減少の一途をたどり、反対に個人用交通の足としての二輪車普及が猛然と進行したために、公共トレム運行事業の将来性が見込めないという主張に反対する声はどこからも起こらなかったのではないだろうか。

2016年3月、コンパス紙はマドゥラ鉄道の現状をルポした。文字通り、鉄道線路と付属施設の現状を見て回るトリップだ。カマル港にあるカマル駅からスタートしたトリップは、カマル駅も線路も何ひとつ存在しなくなっている現状を報告した。しかしひとつだけ、往年の威勢を今に残している建物が見つかった。バライカルヤだ。飛行機の格納庫のような大きい建物が三棟並んで建っている。それは鉄道車両の修理・メンテナンスのためのデポおよびガレージとして使われていたものだ。

建物のひとつはフットサル施設にされて今も使われているが、他の二つはただの物置になっているだけ。付近に夜間照明がないため、夜には無人の暗黒の空間が広がるばかりだから、建物裏の住民たちは怖がってここに寄り付かなくなる。昼間はここを突っ切って表通りに出て行く大の大人も、夜には迂回しているという話だ。コンパス紙記者は、ここはホラー映画のロケにもってこいだ、という感想を書いた。

更に線路を求めて北に向かう。カマル＝クロブガン、クラヤン、バンカラン街道沿いの線路はその姿をはっきりと土の上に現わしていた。バンカラン⇔サンパン区間もすべてが残っていて、場所によっては枕木までが地上に出ている区間もあり、今すぐ列車を走らせてもよさそうな雰囲気が感じられた。

ジャワでは、廃線にされた場所では線路の略奪が起こるのは半ば常識と化しており、それと比較してマドゥラのその様子を「鉄路にとってマドゥラは安全な場所だ」と感嘆の思いを込めて記者は書いた。それはひょっとしたら、ジャワ人のマドゥラ人に対して抱いている偏見もしくは先入観に引っ掛けた皮肉だったのかもしれない。

ジャワ人一般が抱いているイメージの中にいるマドゥラ人は怖いひとびとなのである。ジャカルタにいたわたしですら、「マドゥラ人ともめ事を起こすと後が怖い」という言葉を何度も耳にしたことがある。その怖いひとびとの本拠地とくれば、マドゥラ島は怖い島だという印象が湧きおこって当然だろう。

そんな怖い島に敷かれた線路が何十年もの間略奪されないまま残されている事実は、偏見を抱いているひとびとにとって、きっと新鮮な驚きになることだろう。[完]

2023/6/18 作成

「恐怖のマドゥラ人（１）」（2023年06月20日）

インドネシアで一般に流布しているマドゥラ男のイメージは、黒いゴンブロ gombro ズボンに黒い上着、少しゆるめのシャツは赤白の横縞模様になっていて、こげ茶の頭巾を頭に締めた服装で登場する。

インドネシアの諸種族が頭につける布の頭巾は、頭頂部を覆わずに頭の周囲に巻いて縛るものが ikat kepala、頭頂部を含めて頭全体を覆うものは tutup kepala と呼ばれている。イカックパラにしても、日本のような鉢巻きスタイルでなく、布の一部を立てたり下げたりして洒落るのが一般的だ。上に頭巾と書いたが、マドゥラ人が頭につけるのはイカックパラである。

そしてマドゥラ人のイメージは更に、男のシンボルである鼻ひげを長くたくわえてねじり上げ、その端を耳の穴に差し込んだ獰猛そうな顔が加わり、それでまだ足りなければ手に抜き身の鎌を握らせるといった描写で完成するだろう。

マドゥラ人の鎌は元来の農具が武器専用に用途転換されたものだ。必要に応じて武器にも使われる農具の鎌はインドネシアで一般的に sabit や arit と呼ばれている一方、マドゥラ人の武器としての鎌は celurit と呼ばれる。マドゥラの男が辱めや卑しめを受けたとき、かれらは男の誇りを守るためにチュルリッだけを手にして、伝統文化の作法にしたがった carok と呼ばれる決闘を行うのだ。

チャロッは人の来ない淋しい場所でふたりだけで行われる。開始の前に互いに家族への遺言を言い交す。生き残った者が相手の家族にその遺言を伝え、同時に敗れた者の死体がどこにあるのかを教える。そのとき、敗れた者のチュルリッも一緒に相手の家族に渡される。それ以上にチャロッの勝敗を明白に示すシンボルは他にあるまい。チュルリッは安易に他人の手に触れさせるべきものではない。

誇りのために刃物を使って生命のやり取りをする男たちとくれば、そりゃ怖いだろう。男とは他人を殺す強さを持たなければならない存在であり、そうであってこそはじめて真の男を名乗れるのだという観念はこの半世紀くらい前まで世界中の至るところにあったようだが、今は野蛮という悪名を与えられて地上から消えつつあるように思われる。

もしも男が野蛮と呼ばれる要素を捨てることによって女に似た性質に変化して行くのであれば、人類の進歩とは社会の女性化であると言うことができるかもしれない。何千年もの間、野蛮の道の中で生き死にを繰り返してきた男たちが別の道に移ったとき、真の男という価値観を具現する形としてどのようなものが存在し得るのだろうか？もちろんタネ屋以外のことについての話だ。真の男、そのアンチテーゼとしての真の女、といったジェンダー差別を孕んでいる言葉は男の女性化とともに死語になっていくような気がする。

いや、わたしは男と女の同等性に反対したり、それを否定したりしているわけでは決してない。ただ、男の野蛮な道の中で男同士が殺し合いをしていたのが、その男の野蛮な道の道路フェンスが外されて男女同等の道に広がるわけだから、野蛮な男と野蛮な女が男女同等の道の中で殺し合いをする可能性がアンフェアという基準なしに発生するのではないかと懸念しているだけだ。

それはさておき、上のようなマドゥラ人のカリカチュアは新聞雑誌のあちこちに登場する。東ジャワの伝統演劇 ludruk の出し物に、ありとあらゆる問題事をチュルリッー本で終わらせていくジャゴアンを描いた Sakerah というものがある。あるいはジャカルタ在住マドゥラ人のコミュニティが作ったマドゥラソサエティ同盟が示威行動を起こすとき、チュルリッを手にした男たちが必ず何人もその中に混じる。

プラムディア・アナンタ・トゥルの歴史小説四部作の舞台になったニャイオントソロの経営する農園でニャイに忠節を尽くす暴れ者使用人のダルサムは、チュルリッを愛用する命知らずのマドゥラ人として描かれている。[続く]

「恐怖のマドゥラ人（２）」（2023年06月21日）

マドゥラ人のそんな姿を見る非マドゥラ人が抱く印象は、ハードな生きざま、ひとつ転べば粗野で粗暴、非論理的・分からず屋・感情的、無秩序で礼節がない、傲慢、ジャゴアンと見なされることに憧れ、他人と騒ぎを起こすことを好む、といった付き合いにくい人間になる。

在来パサルで商いをしている人間の中に、客が値引きを求めると怒る者、あるいはタワルムナワル[5]をして最初に言った値段を下げたにもかかわらず客が買うのをやめると怒りだす者がいて、たいていそれがマドゥラ人であるという現実が上に述べた非マドゥラ人の印象を裏付けるものになっている。

インドネシアの在来パサルではタワルムナワルが標準プロセスになっている。客が必ず値引きを求めるから売り手は最初高く値段を言うのが当然のメカニズムなのだ。これは文化の中に生まれた商習慣であって、日本人も何百年も昔は同じようなことをしていた。客を搾取する意図で行われてきたことではない。

売買が勝敗を競う場になっていたという事実は、昔の人間が勝つことをどれほど希求していたかという人間のさがを見せてくれているようで、とても面白い。日本語のオマケや値段をまけるという表現はそのものズバリの言語表現だろう。タワルムナワルの開始は高い値段になっていて、客が要求する値引き価格を受け入れてやることによって販売者が客に勝利の歓びを与えるのがオマケの意味だ。

石にしがみついてでも相手に勝ちたい日本人がタワルムナワルを搾取のように言い、買い手が負けたことを売り手の悪逆非道の行為のように非難する例が多々見られるのだが、日本文化の中では他人をしのぎ、他人を見下して優越感に浸ることをレゾンデートル[6]にしている者がそんな態度をしていては情けないかぎりではあるまいか。東南アジア人と見れば見下すのを習慣にしている者がクセノフォビア[7]になって東南アジア

---

[5] Tawar-menawar 値段の駆け引きのこと

[6] 存在意義

[7] 外国人嫌悪あるいは外国人恐怖

で縮こまっている図はどう見ても自己矛盾しているように思えてしかたない。

客に対して高飛車に出るのはパサルのマドゥラ商人ばかりでない。寄付を求めて住宅地の中を一軒一軒訪問する者の中にもマドゥラ人がいて、しばしば命令口調で金を出させようとする。この手の寄付要求行為に対して住民はみんな「RT／RW の許可を取って来い」と言って逃げるのが普通だ。するとマドゥラ人は「RT／RW じゃなくて、わたしゃあんたに寄付を頼んでるんだ」と言って引き下がらない。

街道を通る自動車から寄付を集めようとするマドゥラ人グループは、道路の真ん中にドラム缶を置いて自動車が徐行せざるを得ないようにし、金を集める。運転者は走りにくくされた上に金まで要求されるのだから、そのやり口に腹を立て、うんざりする。こうしてマドゥラ人は自分さえ良ければよい連中だ、独善的なエゴイスト、他人を尊重しない、といった種族評が世の中に流通するようになる。

マドゥラ人をターゲットにした笑い話もある。マドゥラ人がオートバイを運転していて警官に止められた。運転免許証を警官が要求したから、マドゥラ人は免許証を見せた。写真が違っている。マドゥラ人は「そりゃあわたしの兄弟のものだ。」と説明した。

「他人の免許証を借りて運転するのは違反だ。自分の免許証じゃないとだめだ。」と警官が言うと、マドゥラ人が怒った声で言い返した。「あんたは何を言ってるんだ。兄弟だけが免許証を持っていてオレは持っていないから、兄弟の間で貸し借りをしたんだ。兄弟間で貸し借りをして何が悪い。あんたはそれが悪いことだと言ってる。あんたの言うことは間違ってる。」

別のマドゥラ人がオートバイで赤信号を突っ切った。木の陰に隠れていた警官が飛び出してきて停止を命じた。「赤信号は停止だということを知らないのか？」

「ああ、そのことなら知ってるよ。わたしが知らなかったのはあんたが隠れていたということだ。あんたは警官としてあるまじきことをしている。警官なら交差点に立ってなきゃいけないだろう？」

［ 続く ］

「恐怖のマドゥラ人（３）」（2023年06月22日）

また別の笑い話では、マドゥラ人がスラバヤのドクトルストモ地方総合病院に入院した。スラバヤで第一級の病院だ。医師が診察にやってきたので、マドゥラ人は医師の名前を尋ねた。医師が自分の名前を言うと、マドゥラ人は不満な顔をして医師の診察を拒否した。

「あんたじゃだめだ。わたしゃドクトルストモに診てもらいたいんだ。」

牛泥棒の話もある。牛を盗んだマドゥラ人が警察に捕まった。マドゥラ人は取調官に供述した。「わたしゃ牛を盗んでなんかいませんよ。綱の端を見つけたんで拾った綱を持って帰ろうとしただけだ。ところがその綱の反対の端に牛が付いてたんでさあ。」

たいていの笑い話では、マドゥラ人はうすのろの役回りを持たされ、愚かな考えにもかかわらず自分は正しいと固執し、その姿勢で相手にかかっていく姿に描かれている。

２001年に中部カリマンタンのサンピッとパランカラヤで起こったマドゥラ人マフィアとダヤッ人マフィアの抗争は種族間衝突に発展し、５百人を超えるマドゥラ人が殺され、１0万人超が家財道具を略奪され住居を失って州外に去った。ダヤッ人の中に首狩りの風習を復活させた者がいて、メディア界に大きいニュースバリューを提供した。首を狩られたマドゥラ人は百人近かったそうだ。

その抗争はもっと以前から始まっていて、１996～97年にも大規模な衝突が発生し、6百人の死者が出ている。マドゥラ人のカリマンタンへの移住は1930年にオランダ東インド政庁がはじめたトランスミグラシ政策に乗ってスタートし、2000年にはマドゥラ人移住者が中部カリマンタン住民人口の２1%に達した。マドゥラ人はアグレッシブな経済活動を行ったために地元民の反感を買うケースが昔から頻繁に起こっていた。

そんな事実や噂話がマドゥラ人の肖像画の周囲にあふれんばかりに刻みこまれているのだから、マドゥラ人と悶着を起こすと後が怖いとだれしも考えるようになるだろう。そんな恐怖が心の奥底に影を宿したとき、

マドゥラへ行こうと誘われたなら誰しも躊躇する気分になって当たり前だろうと思う。

だがしかし、そんなイメージにのめりこんでいてはいけない、とコンパス紙記者は言う。マドゥラ島へ行って見てみるがいい。黒いゴンブロズボンと上着、赤白横縞のシャツを着てうろついているマドゥラ男を目にすることはまず起こらない。マドゥラ人の日常生活はスラバヤの町中のような雰囲気であり、現代インドネシアの諸地方都市とたいして違っているわけではないのだ。

村落部にしても同じで、若者は町中のような姿、年寄りはサルン姿でコピアをかぶっている。あの島に1千軒を超えるプサントレンがあることを知っているインドネシア人の中には、女性たちがアチェのように日常でもジルバブやチャダルを着て暮らしているように想像するひともいる。それも想像がもたらした結論だ。そんな姿をしている女性はプサントレンコミュニティの中での話であり、一般的な日常性の中では普通の地方都市と何ら違いがない。

マドゥラの地元文化研究者によれば、黒色上下に赤白の横縞シャツはマドゥラの伝統衣装ではないそうだ。そのスタイルはスペインなどの海賊船乗組員の服装に影響されたものと見られていて、ジャゴアンをシンボライズする服装としてマドゥラの船乗りたちがそれを模倣したのではないかという見解をかれは語った。

だからマドゥラ人にとってその服装はあくまでも男のシンボルなのである。男のシンボルを掲げるのに適切な場でそれをするのが所を得た振舞いであり、日常生活にそこまで男のシンボルを見せびらかす者はかえって非常識と見なされるのがオチだ。かれらにとって男のシンボルを示す場は karapan sapi や otok-otok などの祝祭が該当しているから、そんな祭りの日々には期待された服装の男たちが会場をうろつくことになる。

オトッオトッはマドゥラ式のアリサンであり、数日間祝宴が繰り広げられて伝統芸能も演じられ、華やいだ雰囲気の中でアリサンの抽選が行われる。そんな祝宴の中に tuak が顔を出す。トゥアッはヤシの花の汁を発行させたアルコール飲料で、イスラム化する前のマドゥラはトゥアッの産地としても知られていた。イスラム化してからは、公然とそれを作るマドゥラ人はいなくなったようだが、オトッオトッは相変わらず続けられているのだから、オトッオトッで陽気に騒ぐ数日間、トゥアッの香りが漂うこともあるという話だ。[続く]

「恐怖のマドゥラ人（４）」（2023年06月23日）

カラパンサピは二頭の牛に引かせたそりにジョッキーが乗ってスピードを競う動物レースだ。マドゥラのカラパンサピは225メートルのトラックを20秒未満で走る抜けるそうだから、牛は鈍重な動物だというイメージをマドゥラ人はきっと認めないのではないだろうか。

マドゥラの町々も現代化のあおりを受けて、画一的な町そして街のスタイルに移行しつつある。道路交通・銀行・オフィス・勤め人・食事処・カフェなどの施設が街中を埋めるようになった。サンパンの町には映画館がないが、それが現代化の障害にはならない。スマートフォンを片手に持って目をそこに走らせる振舞いが今では現代人の習慣になっており、マドゥラ人も同じことをする。

現代の町に不可欠な病理も、それを欠いては現代性が失われる。夜の歓楽や売春はカマルの港に上陸したときから密やかに公然と繁栄を謳歌していて、歓楽の巷を持たない県はバンカランからスムヌップに至るまでひとつもない。

マドゥラの4県はスラバヤ・マラン・パスルアン・ジュンブルなどに比べて犯罪発生がたいへん少ない。強盗事件はほとんど起こらないそうだ。ただ、2000年代に入ってから二輪四輪自動車盗難事件の増加が目立つようになった。とは言っても、スラバヤのように一日5～10件というようなレベルからはまだ遠いのだが。

マドゥラで昔から多い盗難事件は牛泥棒だった。特に村長選挙の時期に牛泥棒が激増した。それは牛の持ち主が立候補者の中のだれに投票するのかという旗幟を鮮明にしないからだと言われている。ということは、それは本当の泥棒でなくて公職選挙に関連した政治的な威嚇手段にされていることを意味している。マドゥラ社会では暴力選挙が大きな特徴になっているようだ。

古くは1971年にゴルカル政党がマドゥラ選挙区を独占しようとして、地元のやくざ者を雇って有権者を脅迫した。すると他の政党も同じ方法で対抗した。それ以来、マドゥラでは暴力選挙が普通になった。

実業家や金持ち階層も経済原理だけを信奉したわけではない。スムヌップ県カリアガッのガラム社と塩生産者の間で起こった塩田所有権の争いの中でも、ガラム社がやくざ者を使って塩生産者を抑圧しようとした。マドゥラ島の工業化の手始めにカマルとバンカランの土地払い下げが行われたとき、大勢のやくざ者がそこにからんだという話だ。

マドゥラ島のタバコ葉黄金時代に終焉をもたらした中央政府の商業統制が進められてから、タバコ葉生産者は暴力主義の甘いターゲットの地位に落とされた。タバコ葉が稔るとやくざ者がやってきて、品物を仲買人のだれそれにいくらで売れと強制する。拒否すると畑が荒らされて収穫に大影響がもたらされたり、あるいは人命が犠牲にされた。

総選挙の年には伝統的な暴力選挙に併せて、政党が全国的に行っている大衆動員手法もマドゥラ島に持ち込まれた。封建的社会構造が根強く生き残っているマドゥラ社会では、社会構造の核の部分をつかむことで大衆動員はいとも容易に行うことができた。

国民が自分の判断で政治体制を選択するネーションステートの実現はマドゥラ島でなかなかおぼつかない状態が継続し、政治の腐敗した部分に操られる目先の利益主義が強固に選挙の内容を決めているのがこの島の政治状況であると言えそうだ。

マドゥラ島の自然が全般的に荒野であり、農業に適した場所が小規模で分散していたことがネーションステートの枠組みを構築する社会性をマドゥラ島に容易に育成しなかった原因ではないかと考えられている。自分の生活が狭い範囲の中で成り立っていれば、その範囲の外にある世界との直接的なつながりを日常性の中で感じることを人間はしなくなる。

イマジンドコミュニティは情報流通の活発化がそこにブレークスルーを起こしたから生じたのではあるまい

か。もちろん、いくら情報流通が盛んになってもつながろうとする人間の意志がそこに存在しなければ、イマジンドコミュニティなどはイマジンドファタモルガナにしかならないかもしれない。[続く]

「恐怖のマドゥラ人（５）」（2023年06月26日）

人工的に灌漑がおこなわれることによって灌漑設備の恩恵を受ける農業社会の規模が拡大した。直接的な接触をしたこともない社会構成員の間でイマジンドコミュニティの感覚が生じることも起こり得たはずだ。灌漑の仕組みが農民につながりの意識をもたらす動機になったということもありえただろう。

しかしマドゥラ島では、たとえばサンパン県の住民人口の８割が農業を営んでいるものの、サンパン県に灌漑設備は一ヵ所もないのである。マドゥラ島の農業は昔からの伝統的なスタイルが営々と続けられている。つまり世襲制度だ。

地主の代替わりが起こると、後継者はその土地とその土地で働いていた者たちを受け継ぐ。小作人は代々が小作人になり、農業労働者になる。地主はパトロンになって小作人の面倒を見るし、小作人もクライエントになってパトロンに仕える。オルバ期に行われた緑の革命はマドゥラの農業社会にたいした変化をもたらさなかった。人口爆発と農業の退化は農業労働力を増加させたものの、労働の場が拡大したわけではない。

低学歴労働力の増加が貧困と後進性の空の下でマドゥラの大地を埋めた。その一方で、拝金主義的人間の格付けが盛んになった。財産のない人間はだれにも尊重されない。島の中でどんなに勤勉に働きたいと思っても、やせ細った労働機会と低効率のための低報酬によって財形の道は半ば閉ざされたも同然だ。その解決策が島を出ることになったのも当然の帰結だったろう。行政が進めるトランスミグラシ政策や自由意志による移住を多数のマドゥラ人が選択した。

ジャワに移住するマドゥラ人は学問や宗教を深めようとする知的な人間が少なくなかったが、カリマンタンに移住する者たちの中にはいなかった。カリマンタンが学問宗教を求める場所でなかったのだから、そうなるのが当り前だろう。カリマンタンに向かったのは貧困で低学歴の村落部住民たちだったのである。

サンピッとパランカラヤでの種族衝突事件の底流にそれがつながっている。中部カリマンタンに移住した貧困マドゥラ人は移住先でスラムを作った。いや、カリマンタンだけではない。スラバヤやジャカルタのような大都市ですら、移住した貧困マドゥラ人は行く先々でスラム地区を作ったのである。おまけに同郷者が集まったコミュニティはエクスクルーシブな場所になった。

それがマドゥラ流ということだったのだろうか？そうとは言えない。どの種族であろうとも貧困で低学歴な集団であればコミューナリズムを持っているのが普通だ。そして特定種族のスラム地区ができてしまえば、そこは排他的なコミュニティになるだろう。

サンピッ、サンバス、パランカラヤなどにできたマドゥラ人部落は、地元種族との融和的な関係を築くことよりも経済競争を闘争の色合いを込めて展開する方向に走った。多分そのポイントこそがマドゥラ流だったと言えるのかもしれない。

そしてインドネシア人が独特のニュアンスを込めて使う言葉「マフィア」の抗争が種族間衝突に火をつけたのである。インドネシア人が言うマフィアとは闇ビジネスを行う者、あるいは闇ビジネスをサポートする集団や組織を指している。中部カリマンタンのケースでは、賭博や売春などの非合法ビジネスをバックアップし、それらの事業主が事業を発展させられるように公的私的な障害を除いてやる仕事をマドゥラ人マフィアは行っていた。

他の種族にだってこの種のマフィア業を行う人間は必ずいる。ましてや地元種族においておやだ。どうやらこの部分でも、マドゥラ人マフィアは相互繁栄を目指そうとせず、唯我独尊を志向したのではあるまいか。

tapal kuda と呼ばれているジャワ島東部のパスルアン・プロボリンゴ・ルマジャン・ジュンブル・シトゥボン

ド・ボンドウォソ・バニュワギの諸県は古い昔からマドゥラ島とつながっていた。マドゥラ島南海岸部の住民はマドゥラ海峡を越えて対岸のジャワ島に経済活動の場を求めた。住みついてそこに墓を残す者も少なくなかった。[続く]

「恐怖のマドゥラ人（６）」（2023年06月27日）

１806年にサンパンの太守チャクラニンラが住民25万人をタパルクダ地方に移住させた。そのために、現在のタパルクダ地方はマドゥラ文化の色濃い地域になっている。ただしそれは色濃いということであり、マドゥラ文化の土地になったわけではない。その反対で、ジャワに移住したマドゥラ人にジャワ化が起こったと言う方が適切だろう。いくらジャワ島中心部から外れているとはいえ、中部ジャワにある王国の威勢が届いていなかったわけでは決してないのだ。ジャワ島の支配者は、属国と見なしているマドゥラ島からやってきた者たちに対し、ジャワ化させることで移住を受け入れたように思われる。

２013年にコンパス紙取材班はスラバヤからバニュワギへ向けて北海岸道路を走った。そしてあらゆる町にマドゥラ系のひとびとが住んでいることを再確認した。Gempol の町に入ると、ベチャ引きたちの会話がインドネシア語で行われている中にマドゥラ語がちらほらと使われている。マドゥラ弁の発音は隠すことができない。

Situbondo で給油したとき、30歳台の給油係女性と言葉を交わした。2000年にスムヌップから移住してきたかの女は、「マドゥラでは働こうとしても仕事がない。ジャワには仕事がいっぱいある。」と語った。Banyuwangi にもマドゥラ人はたくさんいるが、シトゥボンドほどの密度ではない。シトゥボンドの町はマドゥラ人の溜まり地だと言われているのだ。

マドゥラ人はジャワでさまざまな仕事に就いている。下はベチャ引きから物売り、更には宗教を教えるウスタツ、公務員、ジャーナリストにまでなって、ジャワ社会の中に溶け込んでいる。

そのコンパス紙記事の中に記されているマドゥラ人と呼ばれている人間がすべて移住者一世であるとはかぎらない。百年以上前に移住してきたマドゥラ人の子孫で、マドゥラ文化を自分のアイデンティティにしている者も含まれている。つまりマドゥラ系プラナカンということだ。

先祖代々が混血を繰り返してきた家系の子孫が外来種族の文化を自分のアイデンティティにするためには、その土地に外来種族のコミュニティが根を張っていることが重要なファクターになるのではないだろうか。

御朱印船時代にあれほど東南アジアの各地にできた日本人町が消滅してしまったとき、その町に最後までいた人間がすべて純血日本人であり、原住民と家庭を築くことをせず、町の滅びとともに日本人町の全住民が純血方針を貫いて根絶やしになったという想像は的外れのような気がする。普通の人間のすることとは思えないからだ。

その最期の世代の中に純血日本人の子供が混じっていたことは大いにありうるだろう。その子が青年期に達したときに日本人コミュニティは消え失せているのだから、地元民と家庭を築いて地元社会に入って行くしか社会生活を送る方法はなかったのではあるまいか。

そのようにしてできた日系混血の子孫が10世代以上も続けば、日本人の血が混じっている人間の数は理論上で数千人にのぼるはずだ。しかし自分の先祖に日本人が混じっていたということすら忘れ去られて、地元種族の大海の一滴になる可能性はきわめて高いように思われる。その数千人はゼロとしてしか日系人の数の中に算入されないだろう。

日本人町が栄華のさなかにあったころ、日本人町の中に地元民と夫婦になって混血の子供を持った家庭は本当に皆無だったのだろうか？それはその日本人町が持ったコミュニティの許容度の問題になるだろう。コミュニティが認めなければ、日本人町を去って原住民社会に入って行くか、それともコミュニティが認める相手と所帯を持つか、という選択になる。日本人というのはそんな昔から純血主義を信奉して自分の心を殺

すのが当たり前の人間ばかりだったのだろうか？

もっと下種の想像をするなら、原住民の女をなで斬りにして男の快炎をあげていた者はいなかったのだろうか？なで斬りにされた女たちの中に妊娠した者はひとりもいなかったのだろうか。その子供は自分の実の父親を知らず、したがって母の文化を自分のアイデンティティとして持ったはずだ。日本の文化がその子の環境に存在しないのだから、当然のことだろう。[続く]

「恐怖のマドゥラ人（７）」（2023年06月28日）

たとえ日本人町を去った日本人の父親と一緒に暮らしたとしても、日本人町を離れた父親自身が地元文化に溶け込まざるを得なかっただろうから、その子供は自分のアイデンティティとして父の教える価値観と母が示す生活様式が折衷する傾向を持ったものと推測される。日本人町というコミュニティから離れてしまうと、子供が自分のアイデンティティとすることのできる父親の文化は父親の中にしか存在しなくなるのだ。結果的に、圧倒的に優勢な地元社会の文化に染まっていく傾向がたいへん高まるだろうとわたしには思われる。

染まらなければ自分の生活コミュニティから浮き上がってしまうのだから。

わたしは人間というものを、幼児期を過ぎると親から離れて、責任を取らせようのない社会というものに育てられる子供ではないかと考えている。だから、人間を血統や姿かたちといった生理学的な要素で見よう、把握しよう、区分しよう、とする姿勢がいかにあやふやなものであるかということをわたしは主張しているのである。どこそこの国にいるXX人種系国民は何人とか何パーセントといったデータが何を根拠にしているのか、そこのポイントに関してわれわれはもっと論理的になるべきではないだろうか？マドゥラの話に戻ろう。

実際に、このヌサンタラにいるたくさんの種族と同様、マドゥラ人もヌサンタラのほとんど全域に散らばって生活している。スマトラのトバ湖周辺にあるカロやトバサモシルやプマタンシアンタルにまでマドゥラ人は住

んでいるのだ。その地方で暮らしているマドゥラ人の多くはサテマドゥラの食べ物商売をしているという話だ。

マドゥラ人に付いて回る怖いイメージとは別に、マドゥラ人には派手好みというイメージもある。スラバヤでは、女性が派手な化粧をすると「マドゥラ人みたいだ」という冗談が飛ぶ。マドゥラ女性は概して化粧が濃く、服装も派手な色使いのものを着用し、本人に似合っているかどうかはあまり頓着しない。

マドゥラ人の派手好みの例にあげられる筆頭がマドゥラ漁船の舳先に描かれるけばけばしい彩色だ。全長9メートルの船体にペンキが塗られる。木の耐久性を高めるためではあっても、使われている色は明るい色調のものが一般的だ。高くせり上げた舳先には、たとえば緑色をベースにし、その上に赤と白で模様が描かれる。おかげで遠くからでも実にはっきりとその姿を識別することができる。

漁船をけばけばしく塗りたくるのはヌサンタラでだいたいどこでも似たような傾向にあるから、マドゥラのトレードマークにはしにくい。だったらスムヌップの大モスクはどうだろうか。17世紀に建てられたとき、その大門は白と金色で塗られた。王宮の大門ならまだしも、そこはモスクなのだ。マドゥラを訪れて観光名所を巡遊するとき、大モスクの大門の前に立って違和感を抱くインドネシア人観光客も少なくない。

墓地を訪れたらもっと歴然とするだろう。ヌサンタラのどこでも、たいてい墓碑は白塗りが普通だが、マドゥラでは緑色や赤色などに塗られているものもあり、エキゾチックさはいや増しになる。

スムヌップから西に向かうとマドゥラ家具の生産センターになっている Karduluk がある。家具や木彫調度品が作られていて、特異な色使いがエキゾチックさを発散させており、一時期全国的に人気の高まったことがある。ニス仕上げのような木目を見せる家具はほとんど見当たらず、濃い緑色を基調にして、その上に赤白黄色で彩色されている。

青年男女が着ている服も概してけばけばしい印象であり、真っ赤なシャツあるいは明るい派手な色の服装が好まれる。アーバンライフを体験した若い女性たちはおおむね厚化粧をしたがる。

マドゥラ人のその派手好みについて地元文化研究者は、心にある歓びの表現が明るい派手な色を選択させるのだと言う。マドゥラ人の人間観は生きることを歓びと捉えている。その快感が歓びの表現として真っ赤

な色を選ばせる。インドネシアで一般的に赤色は勇気や騒ぐ心を象徴していると考えられているものの、マドゥラ人にとっては歓びなのだ。

［ 続く ］

「恐怖のマドゥラ人（終）」（2023年06月30日）

マドゥラ文化オブザーバーはマドゥラ人の派手な色使いや濃い彩色あるいは濃い化粧について、自分を世の中に押し出し際立たせるためにしていることだと言う。「ハードな生き方と激しい競争に満ちたマドゥラ社会で、ひとは自分の成功を、あるいは存在を世の中に示すことに意欲を持つ。自分自身が自分の存在を歓びの心で受け入れるのは生きていく上で重要なことだ。他人と自分との関係の中でしていることでなく、自分自身に対してしていることなのだ」。

それはつまり、マドゥラ人にとって自分の姿を派手に飾ることは、自分を動く美術品にして他人に鑑賞してもらうためではないということなのだろう。

マドゥラ人の生活習慣の中に、上等なマットレスや食器類を持ちながら、それは飾りに置いておくだけで自ら使うことをしないというものがある。だったらあくまでも飾りかと言うとそうでもなくて、自分より社会ステータスの高い客にだけ使ってもらうために用意してあるのだ。

マドゥラ人は経済的な貧困社会の中に独特の価値観を作り上げた。たとえばどんなに小さな収入でも、正当に得られたものは公正な価値を持つものだという一項がある。やせ細った労働機会と低効率に由来する低報酬のおかげで、どれほど高い労働意欲を持って粉骨砕身してみてもたいした収入は得られない。だがしかし、その小さい金額は自分の総力をあげた努力と等価の価値を持っているのである。あぶく銭を惜しげもなくばら撒く姿を示すマドゥラ人がまともな仕事をしている人間でないことはそこからすぐに判る。正しい道

を歩み、つつましやかな生活をしているマドゥラ人が惜しげもなく金を使うのは常識で考えにくい現象ということになるのだ。

マドゥラ人の処世訓の中に「家で食事に糠を食っていても誰にもわかりゃしない。だが付き合いや振舞いがちょっとでもおかしいと、すぐに世間の口の端に登る」というものがある。

派手な服装や厚化粧が社会の中における個人の自己存在のデモンストレーションであることがそこにつながってくるように思われる。それが社会に対して自己を示すための姿であり、私的な暮らしぶりを自然体で見せているのではないということが言えるのではあるまいか。

色の浅黒い若い娘が派手な色の服装や厚化粧をしているのを、非マドゥラ人は田舎者のセンスの悪さという目で見がちだ。事業に成功した者たちの中に、歯に金冠をかぶせる者もいて、非マドゥラ人は悪趣味という評価を与えがちだ。しかし本人の心の奥にあるのは、「どうだ、これでわたしの存在に気付いただろう。」という意気地かもしれない。自分の姿を他人の鑑賞物にする気など、これっぽっちもないということではあるまいか。

マドゥラ人の派手な色使いは中華文化に触発された可能性が感じられる。その傾向はもちろんヌサンタラ各地の沿岸部諸港でも見られるものだ。それらの土地を訪れると、オーナメントモチーフや色使いが中華風に感じられるものにわれわれはしばしば出会うことがある。緑・赤・白・黄金の色の組合せはプチナンに行けば容易に見出すことができるだろう。しかしマドゥラ漁船と似たような装飾を華人の小型漁船に見ることはない。[完]

「文化崩壊するマドゥラ人（１）」（2023年07月03日）

かつては種族別人口統計でジャワ、スンダに次ぐ第三位にあったマドゥラ人が2000年には4位に転落している。2010年国民センサスによればマドゥラ人は人口718万人であり、1930年の人口統計では430万人だったから、80年かけても倍増していないということになる。

1930年の全インドネシア人の数は6，072．7万人だったものが、2010年はご存知の通り2億3，764万人にほぼ4倍増しているのだ。人口密度最大のジャワ島住民人口は1930年に4千万人あった。2010年のジャワ＋スンダ＋ブタウィ＋バンテン等を合算すると1億4千5百万人になる。マドゥラ人にいったい何が起こったのか？

インドネシアの国民センサスの中で種族別国民人口はどのようにして算出されているのだろうか？言うまでもなく、本人の自己申告方式が採られている。つまり各個人が自分を何種族と規定しているのかがそこに示されているのである。本人の意思と無関係に誰かが決めているということではないのだ。本人に自己申告させることによって、種族別人口の合計が全国民人口と一致する結果になる。

本人は何を根拠にして自分の種族を決めるのだろうか？自分の身体的な特徴か、それとも血統か？文化的な観念、と言うか価値観に従って血統を基準に置き、父親の種族を自分のものと言うひとがいるかもしれないが、自我の確立したひとならたいていが自分のアイデンティティになっている種族文化を言うのではないだろうか？

たとえばミナン人の父親とスンダ人の母親の間に生まれた子供がバンドンで生まれ育って、父親の故郷へはときどき連れられて行った体験しか持っておらず、仲間も学校もすべてスンダ人スンダ語スンダ文化の中にいるのであれば、その者は自分をスンダ人と規定する確率が高いように思われる。自分の心情に反して父親の血統を自分のアイデンティティだと言わせるような仕組みはインドネシアの国民センサスに組み込まれていないようにわたしには感じられるのだ。

子供は親の庇護養育から離れると、次は社会がその子を育てて大人にする。その社会が持っている価値観やスタイルが社会交際の中で教えこまれ、その社会の一員に作り上げられるわけだ。そのようにして作られた者は当然自分のアイデンティティをその社会に重ね合わせるはずだ。自分が生まれた土地への郷土愛につながっているものかもしれない。

異文化が混じり合っている環境に置かれたひとびとは、自分の生活行動の中でいずれかの文化に、本人が意図しないまま流されて行くことがしばしば起こる。それは血統や身体的な外見とは関係がない。だが時にはアイデンティティを選択する機会が生じることもある。

たとえば、太平洋戦争が勃発してカリフォルニアやハワイの日系人が敵国人キャンプに収容されたとき、純血日本人である米国生まれの二世や三世が米国を自分の祖国であると決意して名実ともに米国人になろうとした実例を挙げてもよいだろう。かれらを集めた日系人部隊が編制され、米軍の一部隊としてヨーロッパ戦線に送られた。さすがに太平洋戦線には送られなかったようだ。

血統や身体的な外見などの人類学的要素の面から、中でも特に血統に焦点を当てて人種種族の人口を把握する手法は人類学的アプローチ anthropological approach と呼ばれている。本人とは無関係に誰かが机上でさまざまな要因を勘案し、複雑な計算方法で数字を決めるものだ。混血者も純血者もおかないなしに、その人種種族の血筋に該当する（と推定される）人間をその人種としてしまうのである。

混血者が自分のアイデンティティはそこでないと考えていたとしても、この手法が使われるとその者は一方的にその人種種族の中にカウントされることになる。ある総数の中の人種種族区分にこの方式が使われると混血者は最低二度カウントされるから、総数の合計が膨らんでしまう。総人口の中のある種族の人口というロジックにおいては、この手法は使えないように思われる。[続く]

「文化崩壊するマドゥラ人（２）」（2023年07月04日）

一方、インドネシアの国民センサスのように、ある総数の中で人種種族の区分を行う際に用いられる手法はエスニック人口統計アプローチ ethnodemographic approach と呼ばれているものだ。本人が自分のアイデンティティ意識を自己申告する方式だから一人の人間が複数回カウントされることは起こり得ない。

この手法はもちろん世界中で行われていて、たとえばカリフォルニア州のヒスパニック系人口やロンドンに住むインド系人口といったデータを総数内における比率というウエイトで見たい場合はこの手法が使われなければ誤った結論が導かれる可能性が高い。

一方、全英国にインド系の子孫がどのくらいいるのかというデータの場合は人類学的アプローチで得られる数字の方が妥当性を持つだろう。

だからインドネシアの華人人口がどのくらいあるのかという数字が混乱するのは、その二種類を同一平面上に並べて見ているから起こっているのだとわたしは考えている。それぞれの数字がどちらの手法で得られたものかを認識してデータ間の齟齬を理解できている者はどれほどいるのだろうか。かつてインドネシアの最新国民センサスの統計数字が発表されたとき、インドネシア華人の数が意外に少ないというコメントをしたひとが日本人の間に少なくなかった。その原因はそこに由来しているようにわたしは推測するのである。

言うまでもなくインドネシアの国民センサスの中では、華人系インドネシア国民もエスニック人口統計アプローチ方式で算出される。ちなみに2000年国民センサスの華人系人口は174万人で、2010年は283万人になり、10年間で109万人の人口増になった。1930年オランダ時代の人口統計によれば華人系のオランダ東インド住民は123万人であり、70年かけて50万人しか増えていないということになる。これらの数字を単純に出生と死亡という自然現象による増減と考えるととんでもない誤解をすることになるだろう。

2000年のセンサスはオルバレジームが倒れてから二年足らずの時期に行われた。グス・ドゥル大統領が法的に華人復権を行ったのは2000年1月のことであり、多くの華人系国民がオルバの華人抑圧の空気に包まれながらセンサスに応じただろうことは想像に余りある。プリブミとの混血である華人プラナカンがいくら自分のアイデンティティを中華系と考えていても、かれらが正直にそれを公的なセンサスで表明するため

にはもっと時間が必要だったにちがいあるまい。われわれはそれを2000年と2010年の数字から感じ取ることになる。

ところがその一方で、Chinese population in Indonesia というデータが世の中に出回っていて、およそ7百万人という数字が語られているのだ。この定義は祖先がインドネシアに渡って来た華人というものであり、つまりは血統コンセプトが基準に置かれていると理解される。これが自己申告を集めたものでないのは明白だろう。

混血者は最低ふたつの血統を持っていて当たり前だ。親が混血者であれば、ふたつどころではなくなるはずだ。二～三百年前に東南アジアに渡来してきた純血華人がマラッカでポルトガル系・バングラ系・ムラユ系の混じったプラナカン娘を妻にし、その夫婦がスマランに移り住んで子供たちがジャワ系・スンダ系・オランダ系・マナド系・マルク系などの混じった伴侶を持ったら、孫の血統を何系と言えばよいのだろうか？

その家のライフスタイルが中華文化で営まれているためにかれらが中華系と呼ばれているのではなかったろうか。血統をフェアに位置付けるかぎり、血統面からかれらを中華系と呼ぶための根拠としていったい何が使えるのか皆目見当もつかない。華人の血統がそこに混じっているから中華だと言うのであれば、あまりも自尊的になりすぎないか？[続く]

「文化崩壊するマドゥラ人（3）」（2023年07月05日）

わたしはいまだに、華人の血統を持つ人口が東南アジアのどの国に何人いるという数字データが何のために作られているのかがよく分からない。国家ロイヤルティの関連で、中国の国外戦力のような観点からだれかがその数字を見ているのであれば、血統子孫が7百万人いるというデータは戦略を立てる際に意味を持つかもしれない。中高生の中には、この7百万人がインドネシアを乗っ取って中国の属国にするかもしれないと考える可能性もありそうだ。そんな投稿がネット内に時おり垣間見られる。

だがしかし、中国への心的傾斜を持っている者はその三分の一程度しかいないということが283万人と

いう数字から見えて来る。7百万という誇大な数字は何の役に立っているのだろうか。

わたしの個人体験によれば、わたしはジャカルタでいくつかのムスリム華人家庭を目にしている。身体的特徴は東アジア人に酷似しているが、かれらはイスラム教徒であり、日常生活もプリブミのように暮らしていて、中華文化の匂いは感じられない。中国語も話せず、漢字の読み書きもできず、せいぜいブタウィ語の中の福建語由来の単語を使うくらいだ。父親が中国系の雰囲気を持つ名前であったとしても、妻はたいていプリブミであり、子供はイスラム名になっている方が一般的だ。このようなひとびとが7百万人の中にどのくらい含まれているのだろうか。

東南アジアの華人人口に興味を持つ日本人はかなり存在しているように思われるにもかかわらず、17世紀に東南アジアの各地に作られた南洋日本人町の末裔に対する関心はまるで皆無のように見える。たとえ単なる理論的数値だけであるとしても、日本人の血統を持つ日系人子孫がベトナムに、カンボジアに、タイに、インドネシアに何人くらいいるはずだという論にわたしはいまだ接した記憶がない。華人の血統子孫には興味を持つ一方で、日系人子孫については無関心というのであれば、この落差はいったい何を意味しているのだろうか？

東南アジアのどの国にも、自分が日系子孫であるという意識を持つ原住民がほぼゼロだから何の現実性も持たないというのが無関心の原因であるのなら、華人血統子孫7百万人も現実性のない数字になるのではあるまいか？ところが日本人ばかりか、欧米人までもが東南アジア各国の Chinese population を推定している現実があるのだ。

日本民族にとっての混血子孫についてもっと言うなら、江戸幕府の鎖国令によって国外に追放された外国人縁者や家族についての日本人の関心は小さくないように見える。しかしこれも、混血の二世となったひとびとへの関心にとどまっていて、その先の子孫に向けられる関心がそこでぷっつり途絶えているような気がしてならない。

もしもジャガタラお春やコルネリア・ナイエンローデの不運を同じ日本人としての憐みで感情移入しているのであるなら、かの女たちの子孫の中に悲運に呑み込まれた者がもしもいた場合、同じような感情を抱くことができるのだろうか？

たいへん大きい確率で、その人物自身が自分の血の何分の一かが日本人であるということさえ意識していない可能性が高いように私には思われるのだ。それではだめだと言うのであれば、サラ・スペクスが果たして自分をどれくらい日本人だと思っていたのか、それを客観的に判断することができるのだろうか？

とは言え、そんなことよりもわれわれはもう血統主義というアナクロニズムと訣別するべき時代に入っているようにわたしには思われるのである。日本人の血統や中国人の血統などという、そのようなものが政治的な意味を持たされていた時代はもう過去のものになっているのではないか？XX国人やXX民族の血統というもので個々の人間を見よう、把握しよう、扱おう、という態度はもう捨て去られるべきではないだろうか。閑話休題・・・

［ 続く ］

「文化崩壊するマドゥラ人（４）」（2023年07月06日）

マドゥラ人の人口増がインドネシア国民センサスの中で停滞しているのは世間に対して自分をマドゥラ人と認めたがらないことの表れだ、とスムヌップ生まれのマドゥラ人学者が解説した。ヌサンタラの他種族がマドゥラ人に対して抱いているイメージが良いものでなく、社会交際の場でも親しく受け入れてもらえないことが往々にして起こっている。さらにもしもマドゥラ人が社会的に高いステータスを得たとき、自分の出身種族をはっきり示さない傾向が出現している。マドゥラ人の良くないイメージがあまりにも長期間にわたって世の中で継続したために、一種の社会トラウマになってしまったのがそれらの原因である、と学者氏は述べている。

マドゥラ人が他種族の土地にランタウしたとき、自らをマドゥラ人に育て上げた故郷の文化をランタウ先の

ひとびとに示そうとせず、むしろ隠そうとするケースが多い。中でもマドゥラ語の使用を避けてジャワ語を使おうとするのはよく見られる現象だ。ジャワ語が巧みに使える者はその能力を誇りにするそうだ。単に技能が優れているということだけでなくて、自分がジャワ人になりおおせるという実質的なメリットに関わる技能が誇りをより高く押し上げるのだろう。

マドゥラ島の地形と風土がマドゥラ人に独特の性格を育んだ。不毛の土地がかれらを危険に満ちた海に向かわせて、強い勇気と高い自尊心を持ち、硬い意志と旺盛な意欲を抱え、忍耐力の豊かな海洋民族にした。時に、かれらの社会生活の中に過剰なレベルの自尊傾向が現れて、プライドを死守するための、力と力の対決に至る現象が起こった。それがマドゥラ人の暴力傾向を培うみなもとになった。

暴力傾向を持つ社会では、教育レベルの低い階層が自分の欲望を満たすために安易に暴力をちらつかせて他者を威嚇する現象も多発する。それらが合わさって、暴力的で怖い種族だという良くない評価を他種族から受ける原因になったのである。

それとは別に、マドゥラ人は篤信のイスラム教徒にもなった。イスラム教がマドゥラ社会に入って来たあと、マドゥラ人の社会生活はイスラム法で再構築され、個々人の精神の根底にイスラム教が置かれることになったのだ。マドゥラ人を作り上げているイスラムがマドゥラ種族の根源であり、マドゥラ種族の根源であるイスラムがマドゥラ人を作るのである。だが種族意識が逃避傾向を持ったとき、種族の根源に動揺が起こる可能性は小さくあるまい。マドゥラ社会の指導層にとって、現状は頭の痛い問題になっている。

マドゥラ文化が過渡期に入ってしまったことは、民衆生活の中にあった、親が子や孫におとぎ話を語って聞かせる習慣がなくなりかかっている点にも見られるとインドネシア大学人類学者は言う。種族文化の中で口承で伝えられてきたローカルな物語が失われる可能性があることと、その習慣によって作られてきた世代間の親近感が一緒に失われるかもしれない。伝統的な文化を担う世代が次の世代に文化を引き継いでいくというサイクルが消えかかっていることをかれは指摘しているのだ。「子供や孫におとぎ話をしてやるおとなはもう見られなくなった。マドゥラ種族が伝統文化として伝えてきたローカル物語にはたくさんのローカルの

知恵が散りばめられていて、次世代がマドゥラ文化を受け継ぐときに知っておくべき知識がそこにあるというのに。」

マドゥラ文化と一言で言っているが、マドゥラ文化は過去の歴史の中で三つの段階を経てバラエティに富んだ様相を示すようになった。ジャワ＝マドゥラ文化、イスラム＝マドゥラ文化、西洋＝マドゥラ文化の三つの容貌がマドゥラ文化の中に混在している。

マドゥラが歴史の中でひとつの役割を演じ始めたのは１３世紀にシゴサリ王国のクルタヌゴロ王がアリア・ウィララジャをスムヌップのアディパティに任じて以来のことだった。言い換えれば、それがジャワにとってのマドゥラの始まりということになるのだろう。

その段階でマドゥラ文化は社会構造パターン・社会ビヘイビア・芸能のバラエティ・言語構造などにジャワ的要素をたっぷりと吸収した。社会構造パターンとそれに応じた社会ビヘイビアは上下方向の価値観をオリエンテーションにする様式へと向かった。明白に区分された階層が社会を垂直方向に三分割した。王族・王族に仕える役人などの中間層・一般平民がそれだ。マドゥラ語では rato – priyayi – oreng kenek と言う。この構造はジャワにある ratu – priyayi – wong cilik とうりふたつだ。[続く]

「文化崩壊するマドゥラ人（終）」（2023年07月07日）

マドゥラ文化のジャワ化は三つの社会階層間で行われる対話に使われる言語まで作り出した。マドゥラ語にもジャワ語のような社会階層を反映する言語スタイルが生じたのである。マドゥラの芸能にもジャワ的要素が入った。ガムラン音楽がマドゥラの舞台芸能に必須のものになった。

マドゥラ文化の中にある演芸について言うなら、ガムランの伴奏で演じられるのが普通の topeng dalang、ajing あるいは ludruk、その他 slabadan や lawak などの舞台芸能は依然として村落部で生き延びており、都市部でも祭りや結婚式あるいは祝宴などでまだそれらの姿を目にすることができるため、この分野における伝統は強く維持されていると見てよいのかもしれない。

マドゥラのイスラム化もジャワ人がもたらしたものだ。大きい枠組みの中で見るなら、これもジャワ化の一環と見ることができるだろう。だからジャワ人が咀嚼して消化したイスラムがマドゥラ人のイスラムの源泉だと言えるように思われる。

Tanah Seribu Pesantren とあだ名されているマドゥラ島で、島内にあふれんばかりのプサントレンで教えられているイスラム教儀は、アラブ語原本がジャワ語訳されたものがマドゥラに持ち込まれて、それがマドゥラ語に翻訳されたものになっている。

マドゥラ社会でコミュニティを導く社会的有力者としてキアイやウラマが中心的位置に置かれている点にも、ジャワ式イスラムの様式を見出すことができる。これもジャワ文化が持っている垂直方向のオリエンテーションを示すものだ。

マドゥラ人は深くイスラムに帰依しており、そのファナティシズムはジャワ人の比でないという説を裏書きする事例がある。マドゥラの伝統型住居建築様式としてタネアンランジャンというスタイルが知られている。これは一家一族の住居を同一敷地内に集めた場合の建物配置様式の名称だ。イスラムがマドゥラに入ってきた結果タネアンランジャンの同一建物内における生活様式が変化したという話が語られている。大人の男女が寝る場所が切り離されて、女は各自が自分の家で眠り、男が寝る場所はスラウになった。

タネアンランジャンの詳細については拙作

「マドゥラのジェンキ建築（3）」（2023年05月24日）

＜ http://indojoho.ciao.jp/2023/0524_2.htm ＞をご参照ください。

西洋文化のマドゥラ文化への浸透はマドゥラ島がオランダ人に征服されてからスタートした。支配のための闘争との二人三脚で西洋文化との接触が始まったのだから、心酔してその文化を摂り込もうという心情がマドゥラ社会にミニマムだったことが想像される。結局はオランダ人の強力な兵器による戦力と、狡猾な欺瞞に満ちた外交戦略によって、マドゥラ人がその支配下に落とされることになった。そのとき、マドゥラの宗主

がジャワからオランダに入れ替わったことになる。

　そうなる前のマドゥラの地元支配層はジャワから支配権を認められて、地元での最高権力者として振る舞っていた。しかしオランダはその態勢をマドゥラに許さず、マドゥラの支配者は中央政府から給料をもらう一官僚の立場に落とされてしまった。

　西洋文化がマドゥラ文化に摂り込まれた初期時代の目に見える実例は、建築様式の面を筆頭に挙げてよいだろう。プジャガラン王宮、スムヌップ王宮、スムヌップ大モスク、アスタティンギなどの建築物の中に散りばめられた西洋風の要素が、西洋文明と相対したマドゥラの地元支配層が摂り込んだ西洋文化だったのだ。

　マドゥラの民衆レベルにおける西洋文化の浸透は長い時間をかけて徐々に進展して行った。西洋諸国が世界を制覇したあとに世界中で起こった西洋文明のローカル文化への浸透と同じような流れで、それはマドゥラの地に浸み込んで行ったことだろう。

　地元伝統文化の西洋化が文明化の名前で世界中に起こったように、マドゥラ社会もその波に洗われることから無縁でなかったはずだ。だがそれは、マドゥラ人の文化崩壊とはまた別の話になるにちがいあるまい。
[完]

「チュルリッとチャロッ（１）」（2023年07月10日）

恐怖のマドゥラ人はいまだに celurit で他人を攻撃することをしばしば行っている。2023年4月5日にバンカランで村長選挙を前にした選挙運動が行われているとき、チュルリッを持った男が他人に斬りつけて傷を負わせる事件が発生した。

2022年3月にやはりバンカランで起こったチュルリッを使う喧嘩出入り事件のビデオも carok というタイトルでユーチューブにアップされている。普通の服を着た男たちが町のど真ん中で、ひとり対三人で斬り合いをしている画像だ。チャロッの公式定義である、マドゥラの伝統衣装を着て、当人ふたりがだれも来ない場所で果し合いを行うというものとは違っている。

マドゥラ文化の人間がチュルリッを手にして暴力を振るえばすぐにチャロッという言葉が与えられる風潮が起こっているようで、形式にこだわらない感覚が進行しているということかもしれない。

その現象を批判するマドゥラ人識者の書いた記事もネット内に見られる。マドゥラ人がチュルリッで他人に斬りつけたのは pembacokan であり、もちろんチャロッではない。また、チュルリッを手にして斬り合いをするのも、単なる喧嘩出入りでしかない。チャロッは伝統作法を踏まえて秘密裡に行われる果し合いであり、一時の感情爆発で刃物を振り回すものとはまったく異なっている。

昨今のひとびとは非マドゥラ人からマドゥラ人自身まで含めて、プンバチョカンや喧嘩出入りをチャロッと呼ぶ傾向があるがそれは間違っている、というのがその論評だ。

イ＿ア語ウィキペディアの解説によれば、辱められたり卑しめられたりした男が男としてのプライドを維持するために、それを自分にした男とチュルリッだけを手にして決闘し、相手を倒して殺すのがチャロッというものだ。

現代人が勘違いしがちなのは、上で言っている男としてのプライドや自尊心をその人間が持つ個人的な心理傾向と考える点ではないかと思われる。封建社会において、男が支配する社会が与えるプリビレッジを享受できる男は社会が男と認める人間だけだった。だから男としての誇りや自尊心という言葉であたかも個人の心理傾向を述べているような表現がなされているものの、それは社会的な支配階層というステータスに直接関係するものだったということではないかとわたしは考える。

封建社会では、他人になめられて男としてのプリビレッジを行使することもできない男は「男じゃない。女の格好をして女のように生きてりゃいい」という観念が社会常識だった。LGBTには単に生殖の問題だけでなく、この種のエリート観念もからみついている。その観念がいまだに生きながらえているコミュニティもこの広い世界のあちこちに散らばっているから、都市部でLGBTへの尊重が高まって来たからと言って、世界の片隅にその感覚で入って行くのはリスクがあるだろう。

チャロッの原因となる卑しめや辱めとは多くの場合、その男が守護するべき妻や子供に対するもの、その男の手に入ってしかるべき資産や利益が掠め取られるもの、などが該当した。そこから、マドゥラの男が背負ってきた責任がどのようなものであったかが推測できるように思われる。

チャロッは当人の家族が果し合いに賛成したとき、はじめて行われる。賛成しない場合は話し合いによる問題解決が進められる。だが話し合いの根底に男が立つか立たないかという社会的な価値判断が大きく関わっているのだから、両者は自分が勝つことを熱望するはずであり、結局は双方の家族が顔を背け合って社会生活を送るということになるのかもしれない。この仕組みの中では、和解は成り立たないのではあるまいか。

またそれとは別に、果し合いが行われて一方が死ぬと、死んだほうの子孫は殺した側への復讐の念を抱き続けるそうで、世代を越えて果てしない殺し合いが続く可能性もある。[続く]

「チュルリッとチャロッ（２）」（2023年07月11日）

果し合いが行われるとき、三つの条件がそろっていなければならないとされている。まず肉体面と精神面で殺し合いを行う能力があること。武器の扱い・格闘技能・度胸などが不十分であれば、死が待ち受けているだけだろう。次に不死身の術がある。祈祷師ドゥクンに不死身の術をわが身にかけてもらわなければならない。しかし結局負ければ死ぬことになるのだが。

話しでは、相手の身にかけられた不死身の術を破るために、チャロッの準備のひとつとしてチュルリッにkhodamという特別の霊を封じ込めることをするそうだ。こうなると、人間の技能とスーパーナチュラルの補助機能を総動員した闘いになる。対決するふたりは空中を飛んだりするのだろうか？

マドゥラ島東部地方では決闘のときに、左手は腰の帯を握り、右手にチュルリッを持って斬り合うグッテッグサッブという作法も行われているという話だ。二刀流を使う決闘者もいるそうだから、グッテッグサッブをチャロッの条件にすればそれを封じることができるわけだ。

三つ目の条件は金だ。まず既述の二つの条件のための資金。次に、死んだ側の葬式費用。そして勝った者は警察に出頭して殺人を自供し、裁判を受けることになるから、判決を軽いものにするための資金が必要になるのである。

社会が長い歳月をかけて連綿と築き上げてきた伝統慣習と現代法の間に衝突が起こったとき、現代法で否定されている価値観を社会がかたくなに維持しようとする場合、その帳尻を合わせる手法のひとつが多分それだろう。現代人はそれを賄賂と見なし、腐敗裁判を行う法曹界を弾劾するわけだが、そういう基準を適用してこの問題を片付けようとする姿勢が本当に正しいのかどうか、わたしには確信が持てない。

アジアにおけるこの生命観の変化が近代以来、世界制覇を果たした西洋文明への盲従によって生み出されているのであれば、今や黄昏の色濃い西洋文明の栄華がこの先いつまで続くか判らないわけだから、それに取って代わる新文明が新しい生命観を打ち立てる可能性がなきにしもあらずだろう。西洋文明が理

想とした諸価値が本当に全人類の理想であったかどうか（少なくともアジア人の理想になったかどうか）は、今からもう数百年後を見ることで判明すると思われるものの、もちろんわたしがその新たなるものを全人類究極の理想だと考えているわけでもない。万有を構成している個々のものは永遠に存在できるものでなく、滅びの時に至るまでの過渡的現象とされているのではなかったろうか。

ただまあ、試行錯誤で組み立てられてきた生命観が長い時間の中で変化して来たわけだから、より完成したものに向かって進んでいることは間違いあるまい。しかし生命に関する価値観は人類の生存システムに密接にからんでいるはずであり、生命観だけを独立したものと見るわけにもいかないのではないかとわたしは思う。数百年後の人類がどのような生存システムを選択しているのか、多分それがその時代の生存システムをサポートする理論としての生命観を形成するように思われるのである。

ともあれ、チャロッについて上述のところまでは一応の筋道が立っているように思われるのだが、イ＿ア語ウィキペディアの解説には少々奇妙な尾ひれが付けられていた。チャロッのやり方にはふたつあり、世間の目の前で相手の家に乗り込んでいって果たし状を突きつける~ゴンガイと呼ばれるものと、ニュルップと呼ばれる、日常生活の中で相手が犯す油断の不意を衝いて行われるものがあるのだそうだ。

更には、辱めや卑しめを受けたとき、即座に相手に一太刀浴びせるものまでチャロッに含まれると書かれていて、それだと冒頭に書いたマドゥラ人識者の批判は的外れということになってしまいかねない。

この識者はニュルップをチャロッとして認めていないようにわたしには思われるのである。しかしチャロッはその二種で構成されているという解説もたくさんあり、情報を集めれば集めるほど明確な定義に近付けなくなってしまう。[続く]

「チュルリッとチャロッ（３）」（2023年07月12日）

別の資料に、チャロッは一対一のものもあり、一対複数や複数対複数のものもあると書かれている。古式にのっとり、誰も来ない場所で行われるのなら、そんなバリエーションも受け入れることは容易だが、もしも街中で突然数人の男たちがひとりをなぶり殺しするものまでチャロッだと言うのであれば、マドゥラ社会が抱いてきたチャロッの持つオーソリティが損なわれるようにわたしには感じられる。

現代法を歪めてまで維持しようとしている伝統精神は公正や正々堂々といった価値観を描くものにならなければ成り立たないのではないだろうか。もしもマドゥラ人自身がチュルリッを使う喧嘩刃傷沙汰をチャロッと呼ぶように変化してきているのであれば、そのひとびとはチャロッという危険なオーソリティを認めないがゆえにそうしているのかもしれない。チャロッは現代（西洋）文明によって崖っぷちに追い込まれているようだ。

マドゥラ文化でチャロッは神聖視されてきた。チャロッで勝った者は社会ステータスが上昇し、世間はその者に大きい尊敬を捧げるようになる。世間に自分の名をあげ、自分の存在を示すのにこれほど有効な方法も他にあるまい。

伝統作法にのっとらず、日常生活の中で犯す油断を利用し、数人が街中でひとりのターゲットをなぶり殺してそれをチャロッと呼べば、頭の固い人間はチャロッの勝者を尊敬し、下へも置かないもてなしをするかもしれない。そのような方向性が生じれば、チャロッの伝統的な定義はおのずと崩れていくだろう。

もちろんそのような社会心理操作よりも、大衆の知性的な無知と怠惰がその現象を引き起こしている優勢な動因ではないかとわたしは推測しているのだが。

チャロッに付いて回る法曹制度でのなれ合いプロセスがチャロッという暴力現象の存続を保護し、マドゥラ社会に暴力主義を繁茂させている元凶だとある学術論文は言い切っている。その法曹制度でのなれ合いプロセスは nabang と呼ばれ、その分野で働く不良分子の私腹を肥やさせているのだと言う。

チャロッ実行の三条件のひとつである金が、男の名声と名誉を背負った者たちが行う決闘のスタートラインに置かれているのだ。「金がないならチャロッはするな」という格言が人口に膾炙している。ただし金額が特に巨額でなければならないということでもないそうで、法曹界にナバンを行ってもらえるだけの金額が用意できるかぎり、何の障害もないと考えて良いのだろう。見方を変えるなら、それは自分が社会から尊敬される名士になる資本金であり、いざ社会の名士になれば金稼ぎはただのフツーの人間より確実に容易になるだろうと思われる。

ただし、そこにもからくりがある。金額が大きければ大きいほど判決が軽くなって当然だ。そうすることで、判決を与える側も受ける側もメリットが大きくなるのだから。刑法典に記されている殺人罪への刑罰は入獄20年であるにもかかわらず、チャロッ事件で発生した殺人者、つまり決闘の勝者に与えられる判決はまず5年を超えたことがない。

ナバンは法の裏側で行われる闇行為だから、周旋屋がそこに関与するのが普通だ。監獄の中にいる訳知りの受刑者から、警察や裁判所の下働き、当事者たちにもっと身近な村役人に至るまで、顔の広さと弁の巧みさを売り物にする周旋屋は数えきれないほどいる。特に、当人や家族の日常生活に関りを持ちやすい村役人が、社会の名士になった勝者の名士レベルに影響をもたらす力を持っているようだ。どうやら、小さな資本金で長い刑期を終えて社会復帰したチャロッ勝者を村役人はあまりちやほやしないのかもしれない。当然、世間も村役人の態度に倣うだろうと思われる。[続く]

「チュルリッとチャロッ（４）」（2023年07月13日）

チャロッに勝つと、勝者はすぐに警察に出頭して殺人を自供する。それは法治社会において社会責任を果たすための当然の振舞いであるとはいうもののそれと同時に、敗れた側の一族が行うであろう復讐から保護してもらうためでもあるというのが現実なのだそうだ。果し合いの結果は時の運という古武士的な観念は現代マドゥラ社会にあまり残っていないのかもしれない。

そしてナバンが行われ、軽い刑を終えて社会に復帰すれば、法治社会でかれが果たすべき義務は満了し、勝者は社会名士としての輝かしい暮らしに入る。歴史の中で起こった、世間に名をあげて称賛されるということに実利が付随しているのは、時と所を問わず世界中のどこにでもあったし、今でも続いているようにわたしは考えている。

ところが社会的な名誉が実利を生むのを不純と考える文化は、現実に存在している不純に口を閉ざすことで子供たちの目を閉ざし、空中スクリーンに映した絵だけを子供たちに見せてそれを現実と思わせるようにしてきたのではあるまいか。

勝者にそんな未来が待ち受けている一方、チャロッの敗者になった場合は残された家族に悲惨な暮らしが訪れる。勝者が社会でちやほやされるのであれば、敗者は社会からゴミクズのように扱われるはずだ。社会心理がバランスを要求する以上、そんなプラスとマイナスの現象は必ず出現し、プラスの幅が大きければ大きいほどマイナスも深くなると考えてよいように思われる。要はゼロサムコンセプトなのである。

たとえば一家の主人が敗者になったとき、遺族は愛する者を失って喪失感を抱えながら日々を送る。ある調査によれば、それは2ヵ月から6ヵ月間継続する。

マドゥラ社会で一家の生計の柱は男が握る。その柱が抜けてしまうと、生計にも大穴があく。しばらくは貯えで食っていけるようにしておかなければチャロッの土俵に立つことはできないだろう。「金がないならチャロッはするな」はこの面にも当てはまる。

そして世間から見下され侮蔑される社会交際に甘んじなければならない。勝者の栄華が脚光を浴びれば浴びるほど、その陰に置かれた敗者の遺族は悲惨な暮らしに落ち込むことになるのではないか。

現代の学術論文によると、チャロッの発生はふたつの背景を持っており、ひとつは村長選挙、もうひとつはレモと呼ばれる行事だと記されている。レモというのは金を集めるためにジャゴアンたちが集う催事であり、世間にジャゴアンとして名をあげたい男がそこでお目見えをする。自分の腕前を示したい連中が集まるわけ

だから、チュルリッも鞘走り続けるだろう。

ジャゴアンたちが党派を組むのは、人間のユニバーサルな行動のようだ。仲間のひとりが決闘チャロッの勝者になると、かれのナバンのためにレモを催して金集めをするそうだ。反対にこれから決闘チャロッをしようとする者のためにレモが催されることもある。

この話は古式豊かな伝統型チャロッでなくて、現代的な風潮に落ち込んでしまったチャロッの現象的な面を語っているように思われる。

オランダ人社会学者や人類学者がマドゥラ人のハードな性格に興味を抱いてチャロッに関する調査を植民地時代から行っていたから、歴史的な文献も少なくない。

オランダのネイメーヘン大学社会学者ユブ・デ・ヨンガはチャロッの背景に malo と呼ばれる恥の観念がある、と語る。恥を感じたマドゥラ人は刃物を抜いて、その恥を雪ぐ機会にそれを振るう。その機会が今なら今すぐに、今が不適切であればその機会が来た時に。

マドゥラ社会がその恥と暴力傾向の組合せを持つようになったのは19世紀初期だったとデ・ヨンガは言う。その時代、マドゥラのプリブミ支配者たちはコンシューマリズムにのめり込んだ。その費用はかれらの支配下にいる民衆からかき集めた。そのやり方が支配者である貴族階層の権威を失わせたために、慣習法執行者への信頼が崩れた。社会の法に対する服従傾向が弱まり、社会生活の不確定さが広がり、社会を律するものが法から個人の力に移って行ったのがその結果だ。こうして犯罪が激増した。[続く]

「チュルリッとチャロッ（５）」（2023年07月14日）

19世紀中旬にバンカランの行政官僚だったブレスト・ファン・ケンペンの書いた報告書には、1847～49年に毎日殺人事件が発生し、殺された者の遺体が町中のアルナルン広場に捨てられた、と記されている。

１９世紀半ばには、マドゥラ島から対岸のジャワ島タパルクダ地方に毎年数千人の移住が起こった。マドゥラ島が無法地帯と化して力の弱い民衆が抑圧・虐待・搾取のターゲットになっていたのであれば、それから逃れるために故郷を捨てる者が何千人にものぼったことに何も不思議はない。法曹機構はまったく機能せず、あらゆる衝突の解決は力の対決になったのだろう。

一方、別の西洋人学者Gスミスは、チャロッはオランダ植民地体制下のマドゥラで早くから行われていたと語る。慣習法であれ近代法であれ、法に服するよりも力をたのんでものごとを決める性格は、マドゥラ人の一族が集中居住を行わず、分離して暮らさざるを得ない住環境がもたらしたものだとスミスは主張する。そのようなパターンは一元的な社会統制を困難にし、小王がひしめいて力を競い合う環境を容易に形成した。

チャロッを暴力主義に基づいて他人を支配する仕組と見なすのは、あまりにも単純な姿勢だろう。南スラウェシのブギス＝マカッサル社会にある siri'、フィリピンのスル社会が培ってきた maisug などと同じように、名誉や自尊心などの心理要素が暴力を振るう基盤に存在することがチャロッにも不可欠とされている。

シリッやマイスッと同じように、名誉を傷つけられ自尊心を踏みにじられた男がその報復として生命を賭けた対決を行うとき、社会はそれを正当なものと認め、勝者に称賛を与えるのである。それらの社会はそういう価値観を文化の中に作り上げたのだ。

マドゥラ男にとっては、社会生活において自分がひとりの男と認められる要素に瑕疵や不足があってはならない。それらのあってならないものが社会生活において発生したとき、かれの心中にマロの心理が立ち昇り、かれをフラストレーションに陥れる。かれの心にマロが生じたとき、自分は存在価値のないものだという思いが「世間から白い目で見られるよりも死んで骨をさらす方がましだ」という考えを招き、生命を賭して自分をその状態に陥れた者との決闘を決意させるのである。南スラウェシのシリッには対決者間の和解を可能にする仕組が存在しているが、マドゥラにはそれがない。

マドゥラ人にマロをもたらす要素の中に、マドゥラ人の婚姻観も含まれている。マドゥラ社会では男であるオレが妻という立場の女を自分の所有物にするのである。オレが結婚するとプンフル（アダッの長老）によってこの女との間に夫婦の絆が結びあわされる。そのとき、宗教の定める条件も完璧に満たしていることを踏

まえて世間がその絆を承認する。そうしなければ婚姻は成立しないのだ。

もしも誰かがオレの妻に手を出したり妻を卑しめるようなことをすれば、それはアダッと宗教に背き、オレを踏みつけにすることを意味している。踏みつけられたオレが世間の目の前で黙ってそれを甘受すれば、オレは男でなくなる。

マドゥラ社会も、妻を持つことではじめて男が完成すると見ている。複数の妻を持てば男の完成度は更に上昇すると考えられているから、ジャゴアンの上級クラスの者たちはたいていポリガミを行っている。そんなマドゥラ社会では、他人の妻に横恋慕する男のふるまいを「火遊び」と呼ばず、「生命遊び」と呼んでいる。

マドゥラ島の村落部では、女の子がまだ幼児の時期に一族の別の家の男児と許婚の約束をする。その一方で、12～15歳くらいのときに初潮が訪れたあと、よそから嫁に欲しいという声が掛かれば一族は大喜びで結婚の縁組をする。初潮を過ぎた娘がいつまでも嫁に行かないのは一家一族の恥になるのだ。最初の許婚がフェールセーフとしてのものであることが判るだろう。[続く]

「チュルリッとチャロッ（６）」（2023年07月17日）

たとえ形式上とはいえ、娘の身を社会が定めている路線の上に乗せることを一家一族が総力をあげて行っている原理がそこに見られるのである。女がそのようなアテンションを受ける社会で、男の構成員が女をどのように遇するべきか、男は女をどのように処遇しなければならないか、という男の規律面における感覚がほの見えてこないだろうか？

女の扱い方に関する男の規範像がそこに生じ、社会が求める規範から外れた男にマロがのしかかってくるのである。それは単に夫の自尊心に関わるものごとにならず、妻のあり方を損ない、社会秩序の乱れをも意味することになる。そのとき、チャロッは社会性を持つ行為になるだろう。

マドゥラの格言に「女は出産で死に、男はチャロッで死ぬ」というものがある。インドネシアの種族別人口

で第四位を占めるマドゥラ人の母体出産時死亡率がずば抜けて高いとも思えないし、マドゥラ男が日々チャロッを行ってどんどん死んでいるはずもないから、この格言は自然死以外で人間が死すべきケースとして社会が認めているものを謳いあげているような気がする。

だからマロを抱いて世間から白い目で見られながらもチャロッの果し合いに二の足を踏むマドゥラ男は社会が男と認めず、男がすわるべき座に着かせず、男が享受できる社会プリビレッジを与えず、男としての社会生活から疎外され、そればかりか男としてあるまじき人間として他のマドゥラ男からいじめられ迫害されることになりかねない。それがもっと嵩じれば、マドゥラ人ではないと糾弾される懸念もある。もしも閉鎖的な村落部でそれが起これば、その者は故郷を石もて追われることになりかねない。

生命のやり取りをするこのチャロッという行為に宗教はどのように関与しているのだろうか？イスラム教は殺人について、戦争における敵とアッラーへの帰依を捨てた背教者以外に対して行われる殺人を厳しく禁止している。しかしマドゥラ人ウラマたちは、二律背反する宗教と文化の間でアンビバレンツに包まれている。

果し合いを行うマドゥラ男はたいていその準備段階で地元のウラマを訪れて心の準備をする。精神を調整し、勇気を高め、自分の運命に、できれば肉体に、加護をもらおうとする。ウラマの中にはそれに関わろうとしない者もいるが、求める者の求めているものを積極的に与えようとするウラマもいる。「やめろ」と言うウラマはいないようだ。マドゥラ人はチャロッを社会文化のコンテキストで見ており、宗教者であっても宗教面からのアプローチをしないと語るコメントもある。

マドゥラ文化が持つ反宗教的な催事はすべてそうだ。チャロッばかりか、カラパンサピもレモも、あるいは雨乞いの祭りであるオジュンも、イスラム教儀では認められないものなのだ。文化の領域にある伝統催事は、イスラム教が入ってこようが現代法が入ってこようが、マドゥラ人は頑なに文化としてそれを維持し続けている。

チャロッを行うのはたいてい下層階級の人間だ。下層階級で使われている日常言語はマパスと呼ばれる

粗野で下品な、ガラの悪い言語であり、悪態や嘲罵、罵倒や呪いなどの感情表現が豊かに行えるために下層階級者は普通のマドゥラ語よりもマパスを使う方をはるかに好んでいる。怒り・憎しみ・侮蔑などの自分の感情を自由に発散できるからだろう。

闘争的な精神はマパスによって燃焼し、マパスが精神の闘争性を高めることから、マパスがチャロッの維持に一役買っているという意見もある。しかし基盤にあるのは人間の闘争的精神傾向なのであって、マパスがなくなれば闘争的精神傾向が穏やかなものになるのかどうかは疑問だ。

どうやら現代マドゥラ人にとってチャロッの定義はマロを基盤に据えたチュルリッによる斬り合い殺し合いであり、形式を問わない方向に変化しつつあるように思われる。たとえ日常の町中で数人がひとりの男に襲いかかってなぶり殺しにしたとしても、その両者の間にマロの関係が存在したことが明らかになっていれば、世間はそれをチャロッと判断するのではあるまいか。

マドゥラ人にとってチャロッ殺人は他の殺人と異なるものである。マロ不在の殺人はただの殺人であり、またいかに強い女剣士であっても、チャロッ殺人は行えない。チャロッは男のものだからだ。法の前の平等を主張する現代法はチャロッ殺人を「怨恨による殺人」としか見ないだろうが、マドゥラ文化はそれを男の花道にしているのである。[続く]

「チュルリッとチャロッ（７）」（2023年07月18日）

１922年の Jave Post の記事の中に、マドゥラ人と刀剣は切っても切り離せない一体化したものであり、たいていはあらゆる種類の武器を巧みに使いこなすが、もっとも愛用するのは鎌であると書かれている。鎌を持たないマドゥラ人は不完全な状態であって、鎌を持ってはじめてかれはひとりの男になるのだそうだ。

チャロッに切っても切れない縁を持つチュルリッは元々が普通の農具である鎌だったようだ。農具だった鎌がチュルリッにされて、農具として使われなくなった。他人を殺傷し、わが身を守るための武器がその用途である。

マドゥラ男はチュルリッを、男である自分の肉体の一部であると考えている。というのは、アッラーが地上の土で男のアダムを作ったあと、アダムの肋骨を一本使って女のハワを作った。つまり人間の男は肋骨が一本減っているのだから、チュルリッがその不足を補うものだとマドゥラ人は考えたのである。

曲がっている鎌は肋骨の形をしており、その肋骨の代替品は常に左の腰に差される。マドゥラ人にとって深い精神的な意味を持っているチュルリッは、子孫への遺産として代々受け継がれて行く。持ち主が亡くなったからといって、古道具屋に売ることはしない。

チュルリッは普通、牛や水牛の皮で作られた厚い鞘に収められる。刀身の柄は木製の握りの端まで貫通している。チュルリッ製作で有名な土地のひとつがタカブ村で、そこで作られたチュルリッは takabuan と呼ばれてマドゥラのジャゴアンたちの憧れの武器になっている。タカブアンは姿が美しく、しかも素材の鋼が良質であるため研磨すると刃の鋭さが普通のものよりも高まるからだ。

他の人気種にダンオソッがある。dhang はバナナを意味する gedhang いに由来し、osok という大型バナナの実と類似の長さをしていることから dhang osok と命名された。ダンオソッは長めのバナナの実の形をしていて、普段それを持ち歩くことはしない。マドゥラ人が日常で普通に持ち歩くのは普通のチュルリッであり、ダンオソッを持ち出すのはこれから出入りを行うことを宣言しているようなものになる。

それらの優良品チュルリッの他に、テコスブアンブやブルアユムなどと呼ばれるものもある。

マドゥラ島でも、普通の農作業や草刈りには鎌が使われる。チュルリッは刀剣の一種であり、普通一般の鎌とは湾曲が違い、また斬り合いのために必要な諸要素が付加されていて、剣士にとっては生命を託す道具となる。そしておまけに芸術品として扱われるのである。そのため製造工程も農具の鎌とは明白に違って

いる。

農具は鉄で作ればいいが、武器は鋼鉄が使われる。何度も鍛造を重ねて緻密で正確な姿が作り出される。チュルリッがチャロッに使われる場合は、その者が手に入れることのできる最高の製品を選ぶのが普通だ。上質のチュルリッは繊細に白く輝く刀刃を持ち、丁寧に研磨されて最高の鋭さを持たされる。

真のチャロッが何であるかということを、そのこと自体が物語っているようだ。芸術品としての価値が高ければ高いほど、そのチュルリッは使われる場と機会を厳しく選択するのである。チャロッというオーソリティがその最高位の場と機会を提供することになる。

マドゥラ人の主要武器としてチュルリッがいつからその地位を得たのかは、はっきりしたことがわからない。マジャパヒッ王国創始者のラデンウィジャヤを助けてスムヌップの王であるナラリヤ・マドゥラ・アディパティ・ウィララジャの率いる軍勢がマジャパヒッ軍とともにクディリのジャヤカッワンを倒し、そのあとモンゴルの軍勢をジャワの地から追い払ったときの戦争では、マドゥラ人はみんな剣槍弓矢を使って戦争したはずだ。鎌一本を手にする軍勢が敵の剣槍弓矢と戦って勝つとは考えにくい。

結局のところ、剣槍弓矢を手にする場面が日常生活の中に生じなくなったとき、平常の社会生活の中での最適な武器の選択がチュルリッという形をとったのではないかと推測されるのである。[続く]

「チュルリッとチャロッ（８）」（2023年07月20日）

多分その変化が起こるさきがけとなったのが、タパルクダ地方に住むマドゥラ人プラナカンの間で伝説になっている Sakera という人物ではないかと想像される。サケラの物語を読むとかれが愛用した武器が最初からチュルリッと呼ばれているのだが、かれが使った鎌の変形版がそのころ既にその名称

で流布していたのであれば、かれはさきがけになれないだろう。マドゥラ人がチュルリッの発端にサケラの名前を置くのであれば、「武器としての鎌であるチュルリッ」は最初にサケラの手にあった現物が後にそのコンセプトを得たと考えるのが自然であるような気がする。

バンカラン出身の貴族がパスルアンのバ~ギルに移住した。その何代目に当たるのかよくわからないが、その家系にサディマンと名付けられた男児が生まれた。成長したサディマンはバギルのカンチルマスに開かれたサトウキビ農園で働き始めた。１９世紀初めごろの時代のことだ。

そこでマンドル（作業監督人）になったサディマンは公平で包容力のある人柄を作業者や近隣住民に示し、コミュニティで愛される人間になった。身軽に自分の身体を動かして他人に苦労を強いない姿勢をひとびとは称賛し、サディマンにサケラの愛称を与えた。サケラとはそういう意味なのだそうだ。サケラが農園に出るときは常にチュルリッを左腰に差していた。

ある年の収穫期が終わったあと、オランダ人農園主は農園の面積を広げるためにプリブミ農民の土地をあさりはじめた。できるだけ安くできるだけ多くをモットーにしてその強欲オランダ人はさまざまな非人道的手段を使ったために、サケラは心を痛めることになった。中でも、プリブミに対する統治行政を行う地区役人に巨額の褒美を約束して土地を安く売らせるよう強要させたため、サケラは役人の行動を妨害するにいたった。

役人のミッションはたいした成果があがらず、農園主に非難されたために役人はその原因を説明した。「おたくのマンドルが邪魔をするんですよ。」

農園主は烈火のごとく怒った。「わしの使用人がわしの計画を邪魔するとはなにごとか。おいマルクス、サケラというマンドルを始末してしまえ。」

農園主の付き人で秘書役のオランダ人マルクスは始末の仕方を考えた。サケラを怒らせ、こちらにかかってこさせて、それを返討だ。

ある日、サケラがいつものように農園でマンドルの仕事をしていると、マルクスがやってきて作業員をどな

りつけ、「仕事ぶりがなっていない。鞭打ちの罰を与える。」と言って用心棒に鞭打たせた。「作業員はちゃんと仕事をしていますぜ。」とかばおうとするサケラに、「じゃあ、お前が鞭打ちを受けるか。それともかかってくるかっ！」とマルクスが煽る。

マドゥラ男の血がカッと騒いだサケラはチュルリッを抜いた。用心棒たちとの対決はあっけない血祭りに終わり、最後にサケラのチュルリッがマルクスの血をも吸ったのである。

事件の報告を聞いた農園主はすぐにレシデン閣下に届け出た。その時代、レシデン行政区の警察権と裁判権は行政区最高統治者のレシデンが握っていた。農園主はことさら、プリブミがオランダ人を殺したという点を強調した。被統治者が統治者を殺すことはオランダ東インドにあってならないことであり、殺害犯を死刑にしなければ植民地統治行政のたがが緩んでしまう。反抗する原住民は何が何でも厳罰に処して反抗姿勢が広まらないようにしなければならないという理論が、東インドに構築された植民地主義の底流に横たわっていた。理非曲直よりも政治意識がはるかに強い影響力を事件にもたらした。

サケラは逃げて隠れた。警察は総力をあげて捜索したが、なかなか見つからない。するとオランダ人農園主に協力する地区役人がサケラ逮捕の妙案を出した。マドゥラ文化の人間には同文化の人間が執るであろう文化行動がよく分かる。サケラは必ず母親に会いに来るから、母親の家を見張っていればいい。[続く]

「チュルリッとチャロッ（９）」（2023年07月21日）

その読みの通り、ある暗い夜にサケラが母親を訪ねてやってきた。警察は即座に応援を出動させて家を包囲し、地区役人も報告を受けて現場に到着した。

役人がサケラに向かって叫ぶ。「この家は包囲された。もう逃げられないぞ。武器を捨てて降参しろ。お前が抵抗を続けるなら、母親の身は保証されない。母親が殺されてでも逃げるのか？」

母親が殺されてでも自分の身を救おうというのは、男のすることではない。役人の策略は急所を突いた。降参して出てきたサケラに縄をかけようとして捕り手たちが襲いかかり、殴る蹴るの嵐がひとしきり続いた。捕まったサケラはそのままバギルの監獄へ送り込まれた。監獄の中では毎日、虐待の日々が続いた。

サケラには妻がふたりいた。最初の妻はギンテン、若い妻はマルレナと言う。また甥のブロディンを教育するために家に置いていた。このブロディンは遊び人の本性を持ち、女と博打の大好きなやくざな人間だった。サケラが監獄に入ったのを幸い、ブロディンは若妻のマルレナを誘惑してたらしこんだ。同じ家に住んでいるのだから、ブロディンにとっては好都合だ。

しかしその不倫が家の外に洩れ、噂になって監獄内のサケラの耳に入った。妻を甥に寝取られては男が立たない。サケラは恥をすすぐために牢破りを行った。不倫の事実を確かめるために情報を集め、確信が得られたのでブロディンを決闘に誘った。ひとのいない場所で互いにチュルリッだけを手にして一対一の対決をする。そしてブロディンが死んだ。

サケラは更にオランダ人農園主の言いなりになって地元民を虐げる地区役人の命を奪い、災いの根源であるカンチルマス農園のオランダ人たちを血祭りにあげていく。バギルの警察長官がサケラを捕らえようとしたとき、サケラのチュルリッが長官の腕を切り落とした。サケラのチュルリッは止めようもなく荒れ狂った。

植民地における異民族支配という不条理な体制の中で起こっている諸悪に対して、サケラは正義のチュルリッを振るっていたのである。その立脚点からサケラ事件を見るなら、サケラは反植民地造反運動の先駆者としてインドネシア共和国の国家英雄に祭り上げられてもおかしくはないだろう。

しかし現代インドネシアの諸事情を詳しく見るなら、かつて異民族が植民地という体制の中で行っていたのと同じようなことが、同一民族の間で相変わらず続けられている現実をわれわれは目にし耳にするのである。異民族なら悪人を殺しても正義一辺倒になり、同一民族なら悪人を殺すと現代法のために正義にならないというのも、どこかいびつな印象をわれわれにもたらさずにはおかないようだ。

警察はサケラ逮捕に全力をあげた。この反逆者にして脱獄囚である男を捕らえて社会に安寧と秩序を回復させなければならない。そのためにサケラの弱点を探すのだ。サケラが格闘術を学んだ道場の兄弟弟子でサケラと親しかったアジズという者がいる。アジズを官憲側につけてサケラの逮捕に協力させればいい。

巨額の報酬を示されたアジズは官憲の側についた。サケラはタユブの歌舞が大好きだ。祭りの夜にタユブを演じさせてサケラをおびき出そう。やつは必ず出て来る。舞台にのぼればもう袋のネズミだ。

アジズの策略は図に当たり、サケラはふたたび逮捕されて監獄につながれた。そして重大犯サケラに極刑を与えるための裁判が行われ、サケラに死刑判決が下された。こうして植民地体制下のインドネシアで何人ものオランダ人を殺し、統治行政機構に弓を引いた謀反人サケラの生涯が終わった。かれはバギルの監獄で絞首刑になったのである。[続く]

「チュルリッとチャロッ（１０）」（2023年07月24日）

マドゥラ島では1970年代まで、男が家から出るときはチュルリッを左腰に差していた。それは決して農作業に出かける農夫の話ではない。農作業に出る農民は鎌を持って家を出る。農民がチュルリッを持って家を出る時は農作業をしに行くのではない。

１980年代終わりごろまで、外出に刃物を持って出かける種族がインドネシアの中にたくさんあった。80年代終わりごろに親しいインドネシア人から聞いた話をわたしはいまだに覚えている。国有事業体に勤めるかれは、総務関係の仕事のためにパレンバン支社に出張した。わたしにその土産話をしてくれたのだが、その中にパレンバンの男たちはみんな刃物を持って外出するという話があった。ジャカルタっ子であるかれもそのありさまを奇異に思ったため、支社の者に尋ねたそうだ。護身用の武器を持って外出しなければならないほどパレンバンは危険な町なのかと。そしてこんな答えを得た。

「いや、危険は何もない。パレンバンは安全で平和だ。刃物を持ち歩くのは、特に何のためということでもない。ただ、持って出ないと町中で自分が素裸で歩いているような感じがするんだよ。」

わたしがバリ島最南端にほど近い村にジャカルタから移り住んだとき、バリ島村落部の住民が男も女も鎌を持ってウロウロしている姿を目にしてわたしはバリとジャカルタ首都圏の文化の違いを強く感じた。ジャカルタの郊外や首都圏辺縁の村落部ではたいていの男が golok を腰に差していたから、その違いが特に深い印象をもたらしたのだと思う。

ゴロッとは鉈のことだ。スンダ文化ではたいてい木製の鞘に収まった重い鉈を腰に差して村落部の男たちがウロウロしているのが普通だったから、インドネシア新参者のわたしはジャカルタの都会の姿と村落部の様子の違いを目にしてその落差に驚かされた。ジャカルタはブタウィ文化と言われているものの、その基盤のもっとも底辺にはスンダ文化が置かれていることを忘れてはなるまい。

今でこそゴロッは立木を切ったり藪を切り開いたりするのに使われているが、昔は王様が使う武器だった。ゴロッという言葉自体が古代スンダ語であり、最初からこの武器の名称として使われたようだ。パジャジャラン王国ジャヤデワタ王のとき、西暦１５１８年に書かれたサンヒヤンシクサカンダンカルシアンの書に王の使う武器が記されており、その中にゴロッが混じっている。

今ではゴロッの刀身の素材に鋼も使われているものの、昔はもっぱら鉄だったようだ。鋼が主流にならなかったのは、鉄の方が研ぎやすいという理由だったとされている。研磨師が頻繁に王侯貴族のゴロッを研いでいたのかもしれない。だから鋼で作られた刀剣よりも重さがあり、スピードを付けて振れば衝撃力は大きいものになっただろう。

ゴロッは世にある一般的なマチェテと似たような形をしている。しかし長さは短めで、重い。武器としてのゴロッはブタウィのプンチャッシラッによく登場するので有名だ。ブタウィのジャゴアンは昔から素手の格闘技に長じ、また武器としてゴロッを常に携帯して必要に応じて使った。ジャ

ゴアンのゴロッは日本の無頼用心棒にとっての一本刀のようなものだったと言えるかもしれない。さて、バリ人の鎌の話に戻ろう。

　で、そのバリ人の鎌がたいへんな力を持っていることを目の当たりにして、わたしは驚嘆した。インドネシアでは全国どこでも雨季に入る前に、生活環境内にある茂った木々の枝葉を切り落とすのを習慣にしている。わたしの村でも丈高く伸びた草を切り払い、茂った木の枝や幹を切り落とすことを住民が総出で、勤労奉仕として行っていた。

　そのとき、地元民はみんな鎌を持って出て来るのだが、その鎌一本ですべてを行うのである。かれらは直径数センチの枝を鎌でえいやっと切り落とし、幅10センチ近い邪魔な木の幹を鎌ひとつでコツコツと数回叩いて切り取ったのだ。スンダ文化では鉈で行われることが、バリでは鎌でなされていた。バリ人の鎌はスンダの鉈と遜色のない殺傷力を持つ武器として使えるにちがいあるまい。

[続く]

「チュルリッとチャロッ（終）」（2023年07月25日）

　そして十年ほど経過してから、鎌で斬られた人間が10分も経たないうちに死ぬ事件が身近に起こって、バリ人の鎌の威力が証明された。バリ人の普通の家庭にあるのは農具としての鎌だけであり、かれらは刀剣としてのチュルリッなどを持たない。だがその鎌を武器として使えば、人間を殺傷するのも困難でないことが実証されたのである。

　わが家は角地にあり、道路を隔てて斜め向かいに個人住宅がある。その家に真昼間、空巣が入った。わ

たしはその事件を何ひとつ目撃しておらず、パトカーがやってきてはじめて異変があったことに気付いた。次のストーリーは隣近所の住民から聞いた話を元にして構成したものだ。

ふたりの男がオートバイに乗ってやってきて、オートバイをわが家の角に止め、ひとりがそこで見張りに立った。もうひとりがその家の表門の錠を破って静かに敷地内に侵入した。家の主が仕事に出たあとを狙って行った計画的な犯行だ。この賊は何日も前からターゲットの家の様子を観察していたそうだ。

ところがかれらの思いもよらないことに、家の中にその家の奥さんがいたのだ。奥さんは賊が侵入したことを知り、家から遠くない場所で仕事しているご主人に電話して急を告げた。ご主人はおっとり刀でオートバイに乗り、自宅に急行した。もちろん手に持っていたのは刀でなくて農具の鎌だったが。

自宅に着いたご主人は鎌を手にして表門から中に飛び込んだ。玄関の鍵を破って家屋内に入り、金目の物を物色していた賊が慌てて庭に出てきた。そして賊は大型ナイフを手に持ってご主人に襲いかかったのである。ご主人は近隣の住人の加勢を得ようとして「トロン、トロン！」と叫んだそうだが、わたしには聞こえなかった。向かいの家の住人がそれを聞いて現場を覗き、事件を知った。しかし刃物を手にして対決しているふたりに近付くことはせず、遠くから見守るだけだったそうだ。そのときには、外の見張り役はオートバイに乗って逃走していた。

斬り合いは大型ナイフよりも鎌のほうが強かった。賊は鎖骨の左右二カ所に傷を受け、開いていた表門から外に逃げ出した。外で成り行きを見守っていた村人の数人がその後を追った。賊は50メートルほど走って別の家の表に止められているオートバイを目指した。それを奪って逃げようというわけだ。するとその家のご主人が賊をオートバイ泥棒と思って、オートバイのエンジンをかけようとしていたその賊に飛び掛かり、賊を殴り倒したのである。賊は殴り倒されて地面に転がり、動かなくなったそうだ。多分、そのときに事切れたようだ。賊を殴り倒したほうのご主人はきっと後味が悪かったにちがいあるまい。

だれかが事件を通報したのだろう。ほどなくパトカーがやってきた。わたしがその事件を知ったのはそこからだ。警察官が「大量の血だ」と話していた。そのあと救急車がやってきて死体を運び去ったようだ。わたしは野次馬になる気がなかったから二階のテラスから眺めていただけで、家の外に一歩も出なかった。賊を鎌で斬ったご主人は、「人が死んだのだから責任は取る」と語っていたそうだ。しかし警察の取り調べを受け

ただけでお構いなしになった様子で、そのあともその家で普段と同じような暮らしをしていた。

わたしがこの村に住み始めてしばらくしてから、地元の様子を見るために隣接する別の部落まで散歩に出た。さすがにバリだから外来者には愛想のよいひとが少なくなかったが、部落の中ほどまで来たとき中年の屈強な体つきの獰猛そうな男が行く手をさえぎった。

「お前はだれだ。ここの誰に会いに来たのか？」と誰何しながらズボンの腹に斜めに差してあった鎌をそのままの位置で直立させ、刃をわたしに向けたから、どういうわけか、わたしの脳裏に「鎌首を立てる」という日本語が浮かびあがった。「もたげる」でなくて「立てる」だ。しかし呑気に構えていられる状況ではない。

早々に来た道を引き返したから、その男に攻撃されることは避けられた。いくら農具としての鎌であるとはいえ、バリ人は鎌を武器のひとつと認識している。

バリ人の鎌について調べたところ、ジャワで一般に使われている鎌とはクオリティが違っていることが判った。バリ人の鎌は素材に鉄道線路や自動車のコイルバネを鋳溶かした鋼が使われていて、鉄で作られている他地方の鎌とは耐久性や強度において優っている。バリ人の鎌は刀身の全体が白くて薄い。他地方の鎌は刀身が黒くて刃先の部分だけが白いことが素材の違いを、そして性能の差を示しているのだそうだ。バリ人の鎌を決して甘く見てはいけない。[完]

「マドゥラ史略（１）」（2023年08月14日）

東ジャワ州スラバヤにつながるマドゥラ島の住民はマドゥラ族と呼ばれ、ジャワ族とは異なる種族とされている。ドゥティコムの情報によれば、マドゥラ島への人間の移住が行われたのは西暦紀元前4千から2千年ごろの新石器時代であり、そのころ中国大陸での覇権争奪の激化によって中国大陸から東南アジア大陸部へのエクソダスが起こった。この移動でビルマ・シャム・インドシナにプロトマレー人が誕生し、プロトマレーの諸集団はそれぞれが独自の種族に発展した。

更にプロトマレー諸集団の一部が南のヌサンタラ地域に移動して島々に定住する者が出た。コーチシナ[8]のピア、チャンパ、ジャイ族とマドゥラ族は祖先を同じくしていると考えられている。各種族語の中で使われている語彙の中に見られる、共通あるいはたいへん類似している単語とその発音、また頭蓋骨の形態や顔つきの類似性などから、その仮説が現在最も有力な定説になっている。マドゥラ島で発見された古代人の頭骨は目の間が広くて平になっており、頬骨が高い。肌はきめが粗く、色黒だったと推測されている。

マドゥラ族の祖先がマドゥラ島にやってきたとき、そこに先住民がいたのかどうか、いたとすれば土地をめぐる闘争が起こったのかどうか、そのあたりのことを物語る材料は何も得られていない。少なくともマドゥラ族の祖先が新石器文明を携えてきたのは明らかで、方形石斧や土を鋤く石器が古代遺物の中に見つかっており、かれらが石を研ぐ技術を持っていたことが証明されている。

西暦1365年に書かれたナガラクルタガマには、太古の時代にマドゥラ島はジャワ島と陸続きだったと記されている。14世紀のマジャパヒッ王国では、マドゥラ人はジャワ人に特別の親近感をもたらす種族と見られていたのかもしれない。なにしろ、マジャパヒッ王国の建国におけるマドゥラ人の貢献は比類ないものだったのだから。もちろんわたしは、陸続き説を否定しているわけではない。

時の経過とともにかれらの子孫が増加して周辺の小島に散らばって行った。そして移住先のエコロジーの容量に応じた集団を作った。中には数百人にのぼったところもあった。広大な地域の中で分散が起こった

[8] 現在のベトナム

場合は小集団が離れた場所に定住することがあったものの、かれらは同じ一族という意識と同じ言語で結ばれていた。

だが世代が下ってきて地域性が強まると、各集団が閉鎖的になる傾向が起こって一体性の感覚は弱まった。言語にも地域性が影響を及ぼして方言に変化し、西のバンカランから東のカゲアン島までの間で二種類のマドゥラ語方言が話されている。

ジャワ島の自然の豊かさに比較すると、マドゥラ島の自然の貧しさは驚くほどの隔たりがある[9]。不毛の陸地は住民に糧を行き渡らせることが困難なため、かれらは海で不足分を補わざるを得なかった。半農半漁の暮らしがマドゥラでは当たり前のものになり、それは現代にまで続いている。それでも糧は絶対量が不足した。こうして子供たちが大人になると、ランタウ[10]することがその解決のひとつの手法になった。今日、マドゥラ人はヌサンタラの至るところにいて、大勢がソトやサテあるいはジャムゥの商売を行っている。

マドゥラ人がヌサンタラのあちこちにいるのはマドゥラ島が不毛の地だったからだが、その因果関係を仲介したものがまた別にあった。強制栽培制度だ。オランダ東インド政庁はマドゥラ島に栽培させられるものがないとして農業農園活動を命じることをせず、1831年にマドゥラ人部隊を編成させて植民地軍の中に組み込んだ。バリ征服戦争やアチェ戦争で植民地軍がそれらの土地を占領して現地の治安維持を行うとき、常駐する軍兵に土着化する傾向が起こる。その土地で生まれた子孫は地元民として生きることになる。

またそれとは別に、海に強いマドゥラ人は他所で生産された品物を仲介する通商の世界にも踏み込んで行った。逆境に生きてきたマドゥラ人社会に質実剛健の気風が育まれたことから、かれらがその性格をビジネスの場に注ぎ込むとき、ハードなネゴとビジネス姿勢が展開されることになった。時にはそれがマドゥラ人に向けられる嫌悪の原因にもなったのである。[続く]

---

[9] 全島にわたって基礎地盤が透水性の石灰岩であり土地に保水性がないため水田耕作ができない。一方ジャワ島では活火山からの火山灰が土地を豊饒にしている。

[10] Rantau=他の地域への出稼ぎ

「マドゥラ史略（２）」（2023年08月15日）

マドゥラに興った王権もその実質パワーにおいて、ジャワの覇権の前には蟷螂の斧にしかならなかった。カリンガ王国、古代マタラム、マタラムスルタン国などのジャワの王国が勢力を伸長してくれば、マドゥラは常にその属国になった。反乱や抵抗戦が起こらなかったわけではないものの、結果はしょせん、知れたものだった。

西暦1017年以降にマドゥラの領主は自治を謳歌することができたとはいえ、アイルランガ王のクディリ王国やマジャパヒッ王国の統治下では、ジャワの王権に服従するマドゥラ人という構図が普通のものになった。

1269年にシゴサリ王国最後の王クルタヌゴロがダハのパティだったアリア・ウィララジャをマドゥラに移封してアディパティに任じたときに、ジャワにとってのマドゥラという属国の歴史が始まったと言えるようだ。アリア・ウィララジャはポノロゴのアディパティの家に生まれ、成長してクルタヌゴロ王のブレーンのひとりになった。

Arya Wiraraja

クルタヌゴロ王がジャヤカッワンの反乱で倒されてシゴサリ王国が滅んだとき、クルタヌゴロ王の婿ラデンウィジャヤはマドゥラのアリア・ウィララジャの元に逃れて捲土重来の機をうかがい、マドゥラの軍勢の助力を得て目標を達成し、マジャパヒッ王国を興した。アリア・ウィララジャはアディパティ就任後、現在のスムヌップの町からおよそ18キロ離れたバトゥプティに王宮を設けて全島の統治を開始した。バトゥプティには王宮跡の遺跡やジャワ風の舞踊が今に伝えられている。

16世紀に入ってから、ジャワ島北岸の諸領主のイスラム化が進展してマジャパヒッの王権が弱まり、マドゥラもその権力構造の変化の中に呑み込まれた。ドゥマッ・グルシッ・スラバヤなどとの関係が強まってマドゥラのイスラム化が始まり、マジャパヒッに対する服属姿勢は昔日の比でなくなった。

イスラム化が進展するジャワ島内での覇権争奪がしばらく続く間、マドゥラは自立を謳歌したことだろう。し

かしイスラム化したジャワに究極の覇者が誕生したとき、マドゥラは再び属国に戻る運命をたどることになった。マタラムスルタン国第三代の王スルタンアグンが全ジャワに絶対王権を敷くことを目標にして全土を戦火の中に叩き込んだのだ。しかしスルタンアグンの目論見は完成しなかった。かれが征服できなかった土地はジャワ島西端のバンテン王国と、それに隣接するVOCのバタヴィアだけだった。ジャワ島東端から西ジャワの東部までがマタラムスルタン国の支配下に落ちたのである。もちろん、マドゥラ島も含めて。

Sultan Agung

スルタン・アグンがジャワ統一の動きを始めたとき、マドゥラにもその切っ先が向けられた。それに抵抗してマドゥラ人も刀槍を手に立ち上がったものの、ジャワの大軍の前には抗しがたく、一大殺戮が展開されるに至ったのである、1624年にマドゥラ島は蹂躙された。マドゥラの王宮で生き残った王族はラデンパルセナただひとりであり、かれはスルタンに服従してチャクラニンラ1世となり、マドゥラの統治権を与えられた。マドゥラ人4万人がグルシッ Gresik に移住させられている。

Cakraningrat I

チャクラニンラ1世の長男がラデンドゥマン・マラヤクスマだ。チャクラニンラ1世はマタラム王宮にいることの方が多かったため、マドゥラの統治はマラヤクスマが担った。マタラムのスルタンアグンが没するとアマンクラッ1世が後継したがすぐにパゲランアリッの反乱が起こり、アマンクラッ1世はマドゥラ勢にその鎮圧を命じた。チャクラニンラ1世とマラヤクスマがマドゥラ人の軍勢を率いて鎮圧に向かったものの、ふたりとも戦場で命を落としてしまった。

マドゥラ王家の者をマタラム王宮に置いておくのは、マタラム側にとって人材確保の効用と共に人質の意味合いがあった。チャクラニンラ1世が戦死したためにマラヤクスマのまだ幼い長男トゥルノジョヨがマタラム王宮に入った。マタラム王宮で成長したトゥルノジョヨは、祖父と父を戦場に送って戦死させたアマンクラッ1世を憎んだ。[続く]

「マドゥラ史略（３）」（2023年08月16日）

Raden Trunojoyo

成人したトゥルノジョヨは陰謀と奸計の渦巻くマタラム王宮での暮らしを嫌い、そこから26キロほど離れたカジョランで暮らし始める。カジョランでラデンカジョランと知り合い、その仲介でアマンクラッ1世の皇太子と親しくなった。皇太子は父王を憎んでおり、互いに意気投合したふたりはアマンクラッ1世に対する叛乱計画を練り始めた。トゥルノジョヨは１６７４年、ついにマタラム王宮に対して反乱を起こす。

カラエン・ガレソン率いるマカッサル人戦闘部隊の支援を得て、トゥルノジョヨの反乱軍はマタラムの支配下に落ちていたジャワ島北岸地方を続々と平定して気勢を上げた。そしてついに１６７７年、マタラムの王都プレレッを陥落させてマタラム王宮を踏みにじったのである。アマンクラッ1世は皇太子を連れ、王宮を捨てて北岸地方に逃げた。１世の末子であるパゲランプグルを置き去りにして。

マタラムの王権を奪って新王になり国家統治を行なうという気がトゥルノジョヨにはなかったのだろう。かれは恨みと憎しみを晴らせばそれで十分だったようだ。反乱軍の略奪の嵐が王宮内に吹き荒れただけで王宮はそのまま残され、隠れていたパゲランプグルが王宮に戻って戦力の再構築を開始する。トゥルノジョヨはクディリの本拠地に帰還した。

アマンクラッ1世は北岸地方を西に下ってバタヴィアのVOCに保護を頼るつもりだったが、その旅の途中で死を迎えた。王宮から逃げたふたりを守護するのは身近な腹心だけであり、護衛部隊兵士のいない落ちぶれた逃亡行だった。父王が死んでアマンクラッ2世になった皇太子も途方に暮れた。そしてVOCを頼る以外に何の方策も残されていないことを覚った2世がVOCに反乱鎮圧を要請した。報酬は金とスマランの割譲だ。

VOC軍が動き出した。マカッサル人とアンボン人の二軍にバタヴィアのヨーロッパ人部隊を合流させ、ア

トゥルノジョヨの反乱

マンクラッ2世に忠実なマタラム軍と合同でトゥルノジョヨがマタラムから奪った北岸地方をふたたびマタラム領に戻してから、最終的にクディリへの攻撃を1678年9月に開始した。

Raja Amangkrat II

アマンクラッ2世はその大軍を三つに分け、それぞれがあちこちの町を通過してマタラム軍の威容を示すようにさせた。それは人心をトゥルノジョヨからマタラムに引き戻すのを目的にした行動だった。おかげで、各地で武装集団がマタラム軍に加わり、軍容が膨れ上がった。この種の武装集団とは日本で言う野武士・野盗の類であり、勝つであろう方の軍隊に加わって戦争し、戦場で略奪を行って稼ぐ者たちだ。フランソワーズ・タック大尉が指揮する攻撃部隊によって1678年11月にトゥルノジョヨの本拠地は陥落した。

勝ったアマンクラッ2世はスラバヤに凱旋した。プレレッ王宮のパゲランプグルがアマンクラッ2世に敵対しているのだから、本来の王宮に戻れるはずがない。アマンクラッ2世はスラバヤに仮宮殿を設けてそこを本拠にしていたのである。

陥落したクディリの本拠地から逃げたトゥルノジョヨは山岳地帯に隠れながら転々としていたが、結局1679年末にマラン[11]のガンタンで捕らえられてVOC軍の捕虜になった。ところがVOC軍はこの捕虜を指揮官お抱えの捕虜として厚遇したのである。それを見たアマンクラッ2世は、VOCがトゥルノジョヨと手を組むのではないかと恐れたようだ。もしもそうなれば自分の立場が危うくなる可能性が高い。

1680年1月、トゥルノジョヨが東ジャワのパヤッに住む貴族の家で開かれる宴に招かれた。同じように招かれたアマンクラッ2世はそこでトゥルノジョヨに会い、自分のクリスを抜いてトゥルノジョヨを刺殺した。

VOCはマタラム王の勝手な行為に怒ったが、マタラム王はトゥルノジョヨが自分を殺そうとしたので仕方なかったと言い訳したそうだ。オランダ人がそんな言い訳を信じるはずもなかっただろうが、マタラム王を握ってうまく利用するほうが得策と考えたにちがいあるまい。VOCはアマンクラッ2世に罰を与えることをしなかった。

---

[11] 東ジャワ州の学園都市

一方、プレレッの王宮を回復したパゲランプグルは、兄のアマンクラッ2世を敵視した。王宮を死守しようとしない王がいてたまるか、という気持ちだったのではあるまいか。1681年になってこの兄弟間の戦争はやっと終わり、VOCをバックに持つアマンクラッ2世がマタラム国王の座を確保した。パゲランプグルはもっと後にアマンクラッ3世を追放し、パクブウォノ1世として王位に就いている。[続く]

「マドゥラ史略（4）」（2023年08月18日）

チャクラニンラ1世より前の時代のマドゥラ島の内政に関するオーセンティックなデータは数少なく、あまり詳細な点までは分かっていないそうだ。1255年の年号を持つムラマルルン碑文はマドゥラに王国が存在していることを記しているものの、その碑文の中で王あるいは統治者の名前の書かれている部分が消滅している。

マランで発見された碑文にもマドゥラの王国の支配者が記されている。ところがこの碑文の支配者の名前の部分も消滅しているのだ。これが自然現象なのか人為的な作為なのかについての議論が発生した。それが人為的なものであったのなら、それを引き起こした状況に光を当てる手がかりになるかもしれない。この問題は後世への課題として歴史学界の未決箱の中に置かれている。

一方、1294年のクダドゥ碑文には、Songenep（スムヌップの古名）の王ナラリヤ・マドゥラ・アディパティ・ウィララジャがマジャパヒッ創始者のラデンウィジャヤを助けてグラングラン（クディリ）のジャヤカッワンを撃ち破り、そのあとモンゴルの軍勢をジャワの地から追い払った物語が刻まれている。

マドゥラ島は現在、東端のスムヌップ県から西に向かってパムカサン県、サンパン県、バンカラン県と並び、県境は北から南にほぼ一直線に島を分断していて、各県の主要都市はすべて南海岸部にある。

マドゥラの王

元々は各地に散らばったマドゥラ人が地方化の進展によってそれぞれの地区に統治権力構造を作ったようだ。その後、ジャワからの支配権の手が伸びて全島の一括統治者が置かれ、各地区の統治者はジャワの王権代表者としての全島統治者に服従してその下部構造に変化したように思われる。

つまり各地区の統治者の立場は一般的に言われている領主のようなものだったと見なして良いようにわたしは思うのだが、インドネシア語ではそれらが王と呼ばれ、王宮に拠って領民統治を行なっていた体裁で述べられている。KBBIによるイ__ア語 raja の定義は、王国 kerajaan の最高位者、特別な地域の主・種族の長・スルタン、ある環境で巨大な権力を持つ者などとなっていて、日本語の王の語義である「世襲による国家の統治者」の語義と正確にマッチしているわけではない。

だから本論においてスムヌップの王、バンカランの王などと筆者が書いているのはインドネシア語の感覚に合わせたものであることをご理解いただきたく存じます。日本語でこのような場合のヒエラルキーの高低を表現するのに大王・小王という使い方があるものの、マドゥラのケースではニュアンスがフィットしないために使わない。かれらスムヌップの王、バンカランの王たちはジャワの宗主が封じた太守の下位に就く地場の統治機構の最高位者であり、地場の平民にとっては言うまでもなく「王」に該当していると思われる。

似たような話を思い出したが、王 king と皇帝 emperor には格の高低があり、皇帝の方が王よりも上位のヒエラルキーにいるのだからエンペラーと呼ばれている日本の天皇は世界の諸王国のキングたちよりも高位だという説を信じるひとが世界のあちこちにいるらしい。皇帝の下に王がいるという構図からその結論が導かれたようにわたしは感じるのだが、それはその皇帝の支配領域内という環境においてのみ成立する現

象なのではないだろうか。

皇帝の支配領域の外にいる王と何を基準にして格の高低を測るのだろうか。皇帝に服属した王も服属しない王も名前が「王」なのだから同格であり、皇帝は服属した王の上にいるのだから、実際の関係がどうあれ、格が上だという解釈は人間の観念主義教育の結果であるように思えてならない。

日本が一国家としてのまとまりを持ってから、日本の天皇は王と呼ばれる国家統治者を従えたことがあったのだろうか？天皇が emperor という言葉にはじめて翻訳されたとき、それは単なる言葉の綾のようなものでしかなく、現代語 emperor の語義との不一致をみんなが放置した結果が現在の「日本の天皇が現存する世界唯一のエンペラー」という現象になって残されているのではないかとわたしは考えている。少なくとも、そんな格の上下の説を信じて日本の天皇に特別な畏敬を抱く外国の王様女王様はひとりもいないという話だ。[続く]

「マドゥラ史略（５）」（2023年08月21日）

１837年にオランダ東インド政庁はマドゥラの全島をレシデン行政区にしてパムカサンに首府を置いた。レシデンは各地の王が王宮に拠って領民を支配している統治行政システムの中に割り込んだわけだ。オランダ人レシデンがプリブミの王たちの持っている支配権をその掌中に握るのである。いくらマドゥラ島の統治権がジャワのスルタンからオランダ人に譲渡されたとはいえ、従来の統治体制が崩されるのだからマドゥラ人自身が無抵抗で言いなりになるはずもない。それが人間というものの普通のあり方だろう。

最高統治者である王の権力の一部をレシデンが王の下の行政官であるパティに移管させたために専制的だった王がシンボル化されはじめ、パティは首相のような機能を持つようになっていった。レシデンはパティをレシデン統治の直属の部下であると同時に中心的存在の立場に位置付けて、レシデン統治機構の中に抱き入れたのである。

王族貴族が農地の所有権を持つことで生計を成り立たせていたシステムが東インド政庁による農地の課

税システムの開始によって崩れ、王族貴族の経済生活が大きく揺さぶられた。その王族貴族たちをレシデン統治システム内での官僚にすることで、公務員給与がかれらの生活を支える形態に変化した。

パムカサンでは、パムカサンの王パゲランアディパティ・アリオ・スリオ・クスモでなく、王の官僚であるパティをレシデンが統治行政の中心人物にしたために、この官僚機構化によって王権が縮小した。オランダがマドゥラ島を直轄行政区にする最初のステップがそれだった。シンプルで統制のとれた官僚行政組織の中では、王は不必要な駒になる。

領民統治が二頭政治の形に向かった。統治支配機構の本流から外された王が反オランダの旗幟を鮮明にしては何かと困る事件が起こるかもしれないため、オランダ側は1842年に王座を公式に安堵した。しかしその後、王が病気に陥ったのをこれ幸いとして、1853年に王宮を官僚機構から排除した。

スリオ・クスモはオランダ人に反抗し、砂糖工場の賃金1．3万フルデンを納めなかったために汚職容疑がかけられた。また1852～53年の政庁への貢納金7万フルデンも納めていない。最終的にパムカサンは1858年に県になり、王制が廃止された。

東インド政庁は次のターゲットをスムヌップ王宮に据えた。ところがスムヌップ王宮はジャワの王国と姻戚関係を持っていて、なかなかオランダ側の思い通りには進まない。

1854年に亡くなった先王の後継者になったパネンバハン・ノト・クスモは、パティが行政府の中心的存在になるのを放置したと言われている。パティ行政府はレシデンの決定を仰ぐ自治体に変化し、王の意向を実行する行政府でなくなった。

レシデンはパティという役職名称をトゥメングンというもっと高位の名称に変え、行政府の官僚全員に対して植民地政庁が給料を与える方式に変えた。

1873年にパネンバハン・ノト・クスモが病床に就くと、レシデンはスムヌップを県にするよう政庁に進言した。しかし政庁はすぐには動かず、1879年にノト・クスモが病没してからスムヌップの王制廃止に動き出し

た。

まずノト・クスモの養子パゲランアリオ・マンク・アディニンラを1881年にスムヌップ県令に任じ、1883年に王制を正式に廃止したのである。

バンカランでもパティは1847年から公務員給与をもらう立場に変わった。だがここでもバンカランの王であるパネンバハン・チャクラ・アディニンラの扱いに苦慮し、1862年にチャクラ・アディニンラが死去するまで強硬な進め方はなされなかったようだ。

チャクラ・アディニンラが皇太子に指名した末弟のパゲランアディパティが1887年に死去したことで、プリブミ側の統治体制が紛糾した。[続く]

「マドゥラ史略（6）」（2023年08月22日）

王位継承者としてチャクラ・アディニンラの孫を担ぐ一派とパゲランアディパティの息子を推す一派に領地内が割れた。しかしチャクラ・アディニンラの孫はまだ8歳であり、政務を司るには無理な年齢だ。一方のパゲランアディパティの息子は王になるための能力に欠けているという意見が大勢を占めたから、この紛糾はなかなか決着しなかった。レシデンはそれを好機と見なした。

レシデンはバンカランの領地をバンカラン地区・ブレガ地区・サンパン地区に三分割してはどうかと提案したのだ。サンパン地区はレシデンが直接統治するという条件で。

バンカランの王宮は最初それを拒否したが、長い交渉の果てに最終的にサンパン地区をレシデンの統治下に移すことに同意した。こうしてサンパン県が生まれた。

しかしバンカランとブレガの分裂は起こらず、結局チャクラ・アディニンラの伯父にあたるパゲランスリオ・ヌゴロが先王の後継者の地位に就いた。レシデンはスリオ・ヌゴロをバンカランの県令として行政機構内に

置き、1885年11月1日にバンカランは県として生まれ変わったのである。

バンカラン王宮の消滅を受け入れられない王族たちがレシデンに対して強い抗議を表明した。その中心人物のひとりがラデンアリオ・スリオ・アディニンラだ。かれのふたりの息子はプリブミの強力な武装集団を指揮していた。レシデンはアリオ・スリオ・アディニンラを西ジャワのバンドンに流刑した。すると案の定、息子たちに率いられたおよそ8百人のマドゥラ人民兵組織が動いて、バンカラン王宮を占拠したのである。占拠者たちはプリブミの王を作れと要求した。

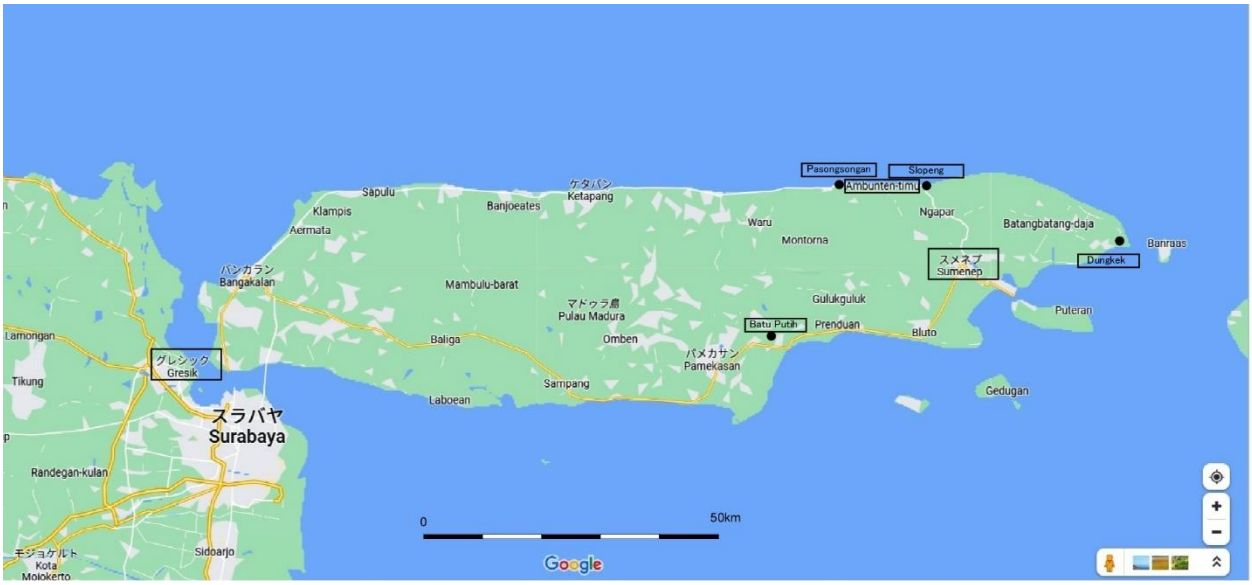
レシデンはその動きを力で抑え込むために、スラバヤから植民地軍歩兵一個大隊を動員して占拠者を王宮から排除した。戦闘は発生しなかった。実にオランダ人は、マドゥラ島の行政統治体制を王制から官僚制に切り替えるために50年近い歳月をかけるという辛抱強さをマドゥラ人に対して示したことになる。

マドゥラという言葉はサンスクリット語で美しい・優しい・可愛いといった意味なのだそうだ。ところが南インドにマドゥラという名前の地方があり、そこは乾燥気候で土地が貧しく、マドゥラ島とよく似た自然環境になっている。ひょっとしたら、その共通性がこの島に与えられた地理名称の由来だったのかもしれない。

総面積5，304平方キロのこの島は北岸と南岸の間が40キロしか離れていない。島の中央部を形成している石灰岩の丘は平坦で、一番高い Tembuku 山ですら海抜471メートルしかない。北のジャワ海と南のマドゥラ海峡を流れる熱風は平坦なこの島を容易に吹き抜けていく。雨が降らなければ緑は育たず、荒涼たる石灰岩のランドスケープが姿をあらわすのも当然の帰結だっただろう。

マラヤ半島とマルクのスパイス諸島を結ぶ航路は、南シナ海からボルネオ島北岸を経るルートと、ジャワ海を通るルートのふたつが作られた。文明発展レベルのより高かったジャワ海ルートにたくさんの港ができた。物資補給や通商の便がくらべものにならなかったのではないだろうか。たとえ距離が長くなったとしてもそのルートを採る船のほうがはるかに多かった可能性が感じられる。

そんな状況が、マドゥラ島北岸にあるドゥンケ、パソンソガン、アンブンテン、スロペンなどの諸港へのアラブ・ペルシャ船や中国船の来航を促した可能性が推測される。Dungkek という地名の由来としてドゥンが最初を意味し、ケッは中国語の客から摂られたのではないかという説があるくらいだ。パソンソガンも昔から国際港になっていた様子を今に残している。



アラブ・ペルシャ船や中国船が持ってくる商品とは別に、船乗りたちが運んでくる文化をマドゥラ人も積極的に摂りこんだに違いあるまい。[続く]

「マドゥラ史略（終）」（2023年08月23日）

そんな諸港に住み着く華人が古くからいた。ずっと以前に通商のために訪れた者たちはたいてい北岸諸港に住み着いた。それ以後も、13世紀末の元軍のジャワ島進攻の際に残った者、更には1740年にバタヴィアで始まった華人街騒乱[12]を逃れて逃げてきた者たちもマドゥラ島に住み着いたから、マドゥラ島の華人

[12] 詳細は http://omdoyok.web.fc2.com/Ah_Indonesia/Aind-81/Aind-81.htm

系子孫と言っても、祖先の時期も背景もさまざまに異なっている。

ところが面白いことに、マドゥラ島にはプチナンがないと言われているのだ。プチナンとは中華街あるいは華人居留地区を意味している。ヌサンタラのどの街に行こうが華人系プラナカンが集まって住んでいる華人街が存在していて、そこには町中に中華風の建築物がたくさん見られ、中華文化が顕著に示されて、異国情緒を色濃く漂わせている。

マドゥラ島に華人プラナカンがいないわけではないにもかかわらず、かれらが中華文化を外に向けてアピールしないことがマドゥラ島内にだけ起こったということが言えるだろう。マドゥラの特異性がこの面にも表れているようだ。

パソンソガンのあるカンプンには50世帯ほどの華人系マドゥラ人が住んでいる。そこの華人系のひとびとによれば、かれらの祖先はスラバヤのアンペルにスナンアンペルが設けたプサントレンのサントリだったそうで、そのカンプンの子孫たちもマドゥラ人一般と同様の篤信なイスラム教徒だ。

住民は自分たちのカンプンをプチナンと呼ばない。かれらは何世代にもわたって地元民と結婚し、地元民の一族と深いつながりを結んで生活習慣をひとつにしており、自分たちの中華血統を世間に示すことをしない。かれらは自分を中華文化の子であると意識していないということなのだろう。

あるムスリム華人の一家は、祖先がそこに住み着いてから七代目の子孫に当たると説明した。その家系が土着化していると言っても、中華文化をまったく持っていないわけでもない。中国に由来する伝統や知識の中に世代を越えて伝えられているものがある。たとえばマドゥラを訪れた鄭和の航海に関するものやハドラマウトコミュニティがマドゥラにやってきたときの話が、その一家ばかりかムスリム華人コミュニティの間での社会記憶として語り伝えられている。

同じように、中華文化に由来する漢方医薬の知識も相伝されていて、それがマドゥラ特産のジャムゥを生む源泉になった。

地元文化に中華文化が混じり込んだ例としてよく言及されるのがスムヌップ王宮と大モスク、そして王家の墓地の一部の建物だろう。プリブミ領主の下でそれらの建物を設計したのは移住華人だった。名前をLauw Pia Ngoと言う。

ラウ・ピア~ゴは1740年に起こった華人街騒乱がジャワに拡大したときスマランから逃げてきた6人の華人のひとりだったそうだ。その事件のためにジャワの各地からマドゥラ島に逃げて定住した華人は少なくなかった。かれらがマドゥラにプチナンを作らなかった理由は華人街騒乱という背景からそこはかとなく感じることができる。しかしもっと以前に住み着いた華人とは事情が異なっているのだから、華人街騒乱をマドゥラ島にプチナンがないという現象の原因にはできないようにわたしには思われるのだが、果たしてどうだろうか。[完]